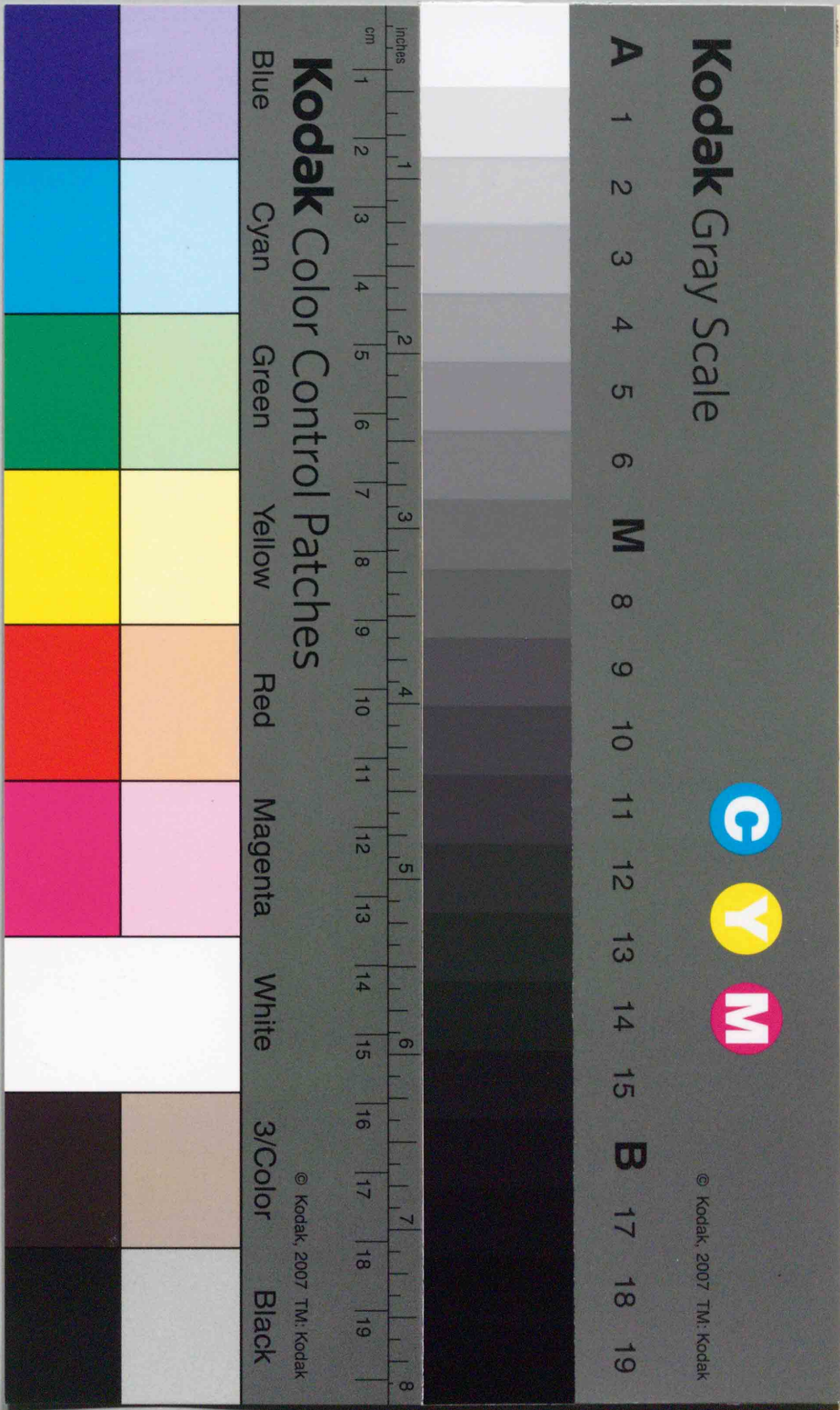
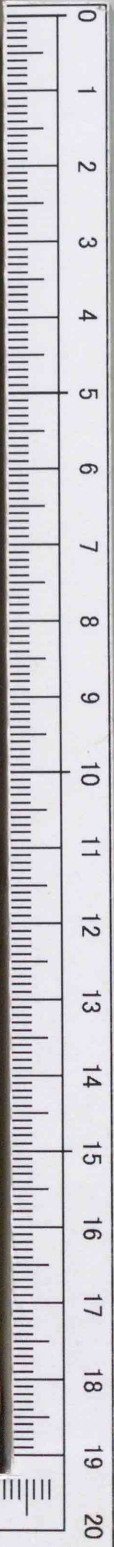


3759  
Nil9  
資料室

高等  
小學  
新讀本  
西村正三郎編述  
下編卷二



30227

教科書文庫

3
810
32-1894
200030 1440





375.9  
N119

廣島大學  
圖書印

桑本姓



安佐郡録井  
字孝之  
桑本姓也

高等小學  
新讀本下篇第二卷

目次

- 第一章 孝
- 第二章 文學の沿革(一)
- 第三章 重量重力及引力
- 第四章 上海
- 第五章 支那の外國貿易
- 第六章 一家の經濟
- 第七章 先哲の書簡 高野長英の郷里の友人に寄せし書
- 第八章 安井仲平ノ東遊ヲ送ル序 鹽谷岩陰
- 第九章 兄弟の友愛
- 第十章 文學の沿革(二)
- 第十一章 液體ノ壓力
- 第十二章 先哲の書簡 樂翁公の大塚頤亭に遣ハシ書
- 第十三章 鬼界島物語(一)

高等新讀本

高等第二卷 目次一

教育書專賣所



第十四章	鬼界島物語 (二)
第十五章	鬼界島物語 (三)
第十六章	夫婦の和
第十七章	文學の沿革 (三)
第十八章	國人皆一タビ僧トナル風俗
第十九章	水ノ構造
第二十章	朋友の信
第廿一章	文學の沿革 (四)
第廿二章	水ノ分子
第廿三章	水銀ノ原子
第廿四章	孝子の馬鈴薯 (一)
第廿五章	孝子の馬鈴薯 (二)
第廿六章	ロッキイ及セルカルク (一)
第廿七章	ロッキイ及セルカルク (二)



高等小學新讀本下篇第二卷

西村正三郎 編述

第一章 孝

子をよく父母に事ふるを孝といふ。凡貴賤貧富の差別なく、我を生めるに、父母なり。我を養ふにまた父母なり。我を愛し我を教ふるも、亦皆父母ならぬをなし。させば、其恩山よりも高く、海よりも深しといふべし。孝は人の大恩ある父母に事ふる道なれば、孝經も人の行孝より大なるかといひ、又孝は徳の本なりとも云へり。實に孝行を盡すほどの人ハ、これを他人に推して考ふるも、必忠愛なるべき理にして、も一父母に孝あらざれば、必他人にも不親



切にして、遂ふハ世よも棄てらるべき理なり。されば、孝ハ百行の基にして、人倫の第一と申をべし。然るに、世ハ父母の恩を忘れ、己の知識に誇りて、父母を侮り、甚しきハ、父母に對して、口論をる者さへあきよあらば、あゝる輩ハ、實ハ大不道の大惡人といふべし。今の父母の中ハ、學問せざりし人もあらん。されど學問せざりしとて、いかでて、父母を侮るべき。今日の人ハ、幸に泰平の世ハ生れたるが故よ、知識をみぶくおとを得れども、是よと父母の恩よらずといふことなし。又禮記ハ君に事へて、忠あらざるハ、孝にあらば、官ハ蒞みて敬ならざるハ、孝にあらば、戰陣勇なきハ、孝よあらばとあり。されば何事によれ、己の務むべき事を怠るハ、皆不孝のまじなり。農夫の耕作を勤めざる

も、商人の賣買を怠るも、皆不孝の罪あるべく、學校の生徒の勉強せざるも、亦不孝の罪を免れざるべし。鳥ハさへ、反哺の禮ありといへり。人として不孝の行あらば、鳥類にも劣りぬべし。勅語に爾臣民、父母に孝をれと宣をせ給へる有り難き御旨を、常に身よ體して、須臾くも忘るべからば。

第二章 文學の沿革 (一)

方今學藝盛に興り、到る處學校の設あらざるなく、村閭の兒童も、亦能く書を讀み字を知ると雖、上古ハ氣運未開け、僅よ談部ありて、口々に事跡を傳ふるに過ぎざりき。要するに、上代文字の有無ハ、確知をべのらず。平田篤胤の如きハ、古字を拾採して、古代ハ文字ありしおとを説けど



も其文字の廣く世に行はれし者ふあらざることハ明なり。故に我が國に文字の實用せられしハ漢字の傳來に始まると云はざるを得ず。應神帝の朝に當り、百濟の王仁來朝して論語十卷、千字文一卷を獻ぜり。是本朝文教の興りし始なり。皇子稚郎子ハ王仁を師として漢籍を學び給ひき。時に高麗我の不文あるを侮り、上書中多く不敬の語を用ゐたりしに、皇子大に怒り給ひ、奏して其貢を却け給へり。履中天皇史官を諸國に置き、四方の民情を通し給ふ。推古帝に至り、始て留學生を隋に遣はし、爾後歷朝之を絶たば。帝又厩戸皇子及蘇我馬子に勅して天皇記、國記及公民本記を撰ばしめ給ふ。是官吏の始なり。然もども、其書ハ蘇我氏の亂に、兵火に焚かれて傳はらば。今傳ふる所の舊事本

紀ハ後人の偽撰ありと云ふ。元明帝の朝、太安曆、古事紀を上る。今世に傳ふる所の國史ハ於て、最古の者とす。元正帝舍人親王に命じて、日本書紀を撰ばしめ給ふ。是を編年史の始とす。桓武帝、續日本紀を撰ばしめ給ひ、仁明帝、日本後紀を撰ばしめ給ふ。其後續日本後紀、三代實錄、文德天皇實錄成る。日本書紀以下、之を總稱して六國史と曰ふ。此他菅原道真ハ、類聚國史を撰す。今僅に其三分一を存するのみ。是より官撰の史絶えたり。後世私史續出し、其幾百種なるを知らず。中に就き、徳川氏の時、源光圀、儒臣を集めて撰集したる大日本史ハ、方今最良の史と稱せり。天智帝始て學校を設け、又令二十二卷を制し給ひしを、今傳はらば。文武帝、忍壁親王等に命じて律令を撰ばしめ給ふ。其後嵯峨帝



の弘仁格式醍醐帝の延喜式等律令格式の制亦頗多しと雖大寶令延喜式の外今完き者鮮し。後堀河帝の朝に北條泰時式目五十一條を定めて今も存す。其他記述をるも暇あらず。文徳帝大學の制を定め大學寮を置き始て釋奠の儀を行はせ給ひより後世此禮を缺かず。當時大學の科を分ちて紀傳明經明法算道の四となせり。王政漸衰へ公卿も亦偷安怠惰にして浮華の詩文を事とし聖武孝謙二帝以後益文華を競ひ歌詩盛に行はる。嵯峨帝の如きは最詩文も長し給ひ小野篁等の如きも亦文を以て後世も名あり。嵯峨帝の初内宴を設け群臣をして詩歌を獻せしめ給ひしとあり。光孝帝及村上帝皆歌を善くし給ひ作者隨て輩出し撰著亦多し。漸文弱の風も赴きし。かども宇多醍

醐二帝の朝實學篤行ある菅原道真三善清行の如きあり。道真の道德文章は實も百世の師表と爲り清行の意見封事の如きも宏圖深猷一世も卓出せり。以て當時の士風未全く衰へざるを見るべし。冷泉帝以後政外戚に歸し天子の唯風月を詠し閑を消し給ふのみ。文學大に衰へたり。後三條帝之を回復せんとして給ひしも在位長からば時に大江匡房の如き實學賢才の人なきにあらざるも能く爲す所あるなし。白河堀河二帝の朝も至りては淫逸風を爲し其文見るに堪えぬ。終に國家の大亂を馴致せるに至れり。其才識を抱きし士大江廣元等の如き朝も用ゐらざりて去て武門を助くるを致す嘆むべきあり。武門政を執るに及び北條氏の如き亦能く



文士を參用して政を為す。青砥藤綱の如き蓋其尤あり。後醍醐帝の朝に當りて、天下大に亂れたりと雖、武人猶實學の士あり。楠正成、兒島高德等を觀て知るべし。是時北畠親房、著徳を以て朝政を輔け、著述所の神皇正統紀の如き、今日に至るまで、世人の珍とをる所なり。其世道人心を補益せしむと歎あらばと云ふべし。足利氏の亂より、文運日衰へ、僅ふ細川頼之の如きありて、學問を講べたれども、その季世に至りては、戰亂相繼ぎ、亦論ずべきやうなり。唯當時の豪傑小早川隆景、北條氏康、上杉輝虎の如きは、頗文學を好む。武田晴信、伊達政宗、直江兼續等之も亞げり。然れども、之を以て人民を教化をるに至ては、小早川隆景に始まる。此時に當て、藤原惺窩、始て程朱の學を唱へ、以て徳川

氏の時に至り、其學大に行はれ、漸文學の盛を鳴らし、以て今日に至り、更に洋學も亦大に開くるに至れり。

第三章 重量重力及引力

一羽ノ輕キモ、之ヲ空中ニ放ツトキハ、必地面ニ向ヒテ落下スベシ。殊ニ金石類ノ如キハ、地面ニ落ちントスル勢力、甚盛ニシテ、其稍大ナル者ニ至リテハ、之ヲ中途ニ支フルコト、容易ナラズ。有形物ハ、皆此ノ如ク地面ニ落ちントスル勢力アル者ニシテ、之ヲ物ノ重量ト云フ。凡テ物ハ、重量ノ多少ニヨラズ、皆地面ニ向ヒテ落下セザルハナシ。而シテ地球ノ形ハ、圓キコト、橙子ノ如クナルガ故ニ、地球ノ周圍ニ在ル萬物ハ、皆地球ノ中心ニ向ヒテ集マルナリ。今我が日本ト亞米利加トハ、地球ヲ隔テ、互ニ



其跡ヲ對スルノ地ナリ。故  
 二若此兩國ニ於テ同時ニ  
 降雨アルトキハ、其雨滴ハ  
 相向ヒテ下墜スル者ナリ。  
 此ノ如ク萬物皆地球ノ中  
 心ニ向ヒテ落ツル者ハ何  
 ズヤ、是有形物ニハ重力ト  
 稱スル一種ノ力アルニ因  
 ルナリ。  
 今悉宇宙間ノ萬物ヲ消滅  
 シテ、全ク世ニ存スルコト  
 ナカラシメ、僅ニ二個ノ小



水滴ノミヲ存シ、之ヲシテ互ニ相距ルコト、數百里ノ所ニ  
 在ラシムルヲ得バ、此二個ノ水滴ハ、必雙方ヨリ互ニ近接  
 シ來リ、遂ニ衝突融合シテ、一トナルベシ。何トナレバ、有形  
 物ハ、皆互ニ相近接セントスル力アレバナリ。之ヲ稱シテ  
 重力ト云フ。

抑重力ハ、其物ノ大小ト、其質ノ疎密トニ應ジテ多少アリ。  
 二個ノ水滴、互ニ相近ヅクニ當リ、甲ノ水滴、若乙ノ水滴ヨ  
 リ大ナルトキハ、甲ノ乙ヲ引ク力ハ、必乙ノ甲ヲ引ク力ヨ  
 リ大ナラザルヲ得ズ。從ヒテ甲ノ乙ニ向ヒテ動クコト少  
 クシテ、乙ノ甲ニ向ヒテ動クコト多キナリ。雨滴ノ地球ニ  
 向ヒテ墜ツルモ、亦此理ニ外ナラズ。地球ハ雨滴ニ向ヒテ  
 近ヅカントシ、雨滴ハ地球ニ向ヒテ近ヅカントシ、互ニ相



引クト雖地球ハ雨滴ニ比スレバ其幾千倍ナルヲ知ラザルガ故ニ其實地球ハ雨滴ニ向ヒテ動クコトナク雨滴獨地球ニ向ヒテ動クナリ。故ニ萬有ニ重量アルハ其重力アルガ為ナリ。又此重力ヲ稱シテ引カト云フコトアリ。蓋地球ハ萬物ヲ引キテ地上ニ墜下セシムルガ故ニ之ヲ引カト稱スルモ不可ナルコトナシト雖引カハ畢竟重力ノ別名タルニ過ギザルナリ。其有テ叙述スレバ左ノ如シ。今重力ヲ以テ一ノ萬有法トシテ叙述スレバ左ノ如シ。二個ノ物アルトキハ必共ニ相向ヒテ運動ヲ始メ其物質多キモノハ運動遅ク少キモノハ速ナリ。而シテ二者相近ヅクニ從ヒ運動ノ勢力益強大トナル。

**問答** 物ノ重量トハ如何ナルコトヲ云フヤ。百萬物必重

量アル例ヲ語レ。重力トハ如何ナル力ナルヤ。其解シ易キ例ヲ語レ。雨滴ハ何故ニ地面ニ向ヒテ墜ツルカ。

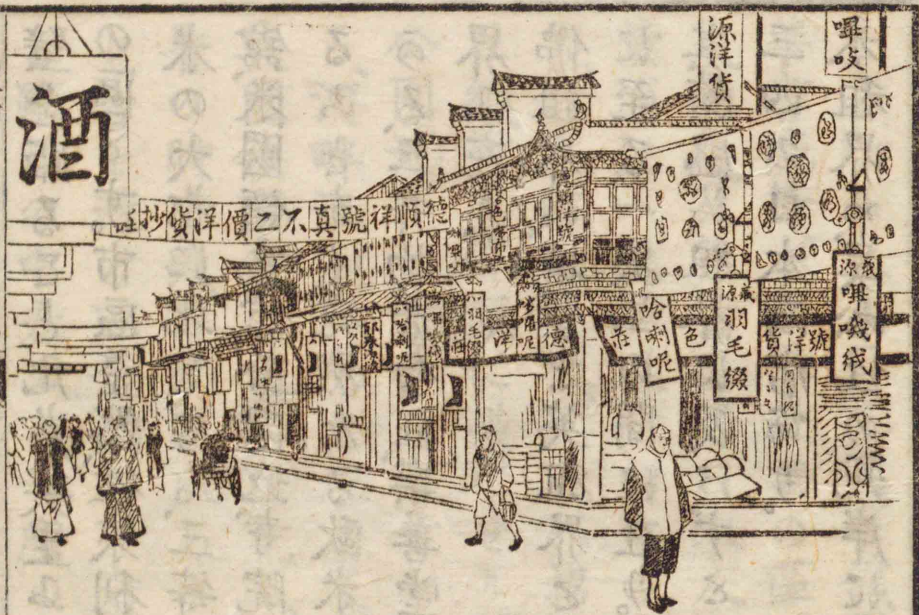
### 第四章 上海

上海港ハ江蘇省淞江府に屬シ上海縣治の在る所にして北緯三十一度十五分東經百二十一度二十九分ニ位シ蘇州江の黄浦江ハ會流を交點に跨れり。我々長崎港より東海を横航して西北に駛るると四百五十哩にして揚子江口に至ると右に崇明の三角洲を望み江口を溯ると四十八哩、吳淞に達し左折して吳淞江に入り支那の水師及砲臺を右岸に見て更に同江を溯ること凡十三哩にして即上海港に達す。地勢極めて平坦にして四望茫漠た



り。東西南北ふ山もなく、岡となく、唯濁流の渾々として、縦横に貫通するを見るのみ。人口約六十萬、百貨輻輳し、規模宏壯、港灣良好にして、肆店櫛比し、帆檣林立す。真に東洋貿易の中心市場たる名ふ背のざるなり。

縣城ハ黄浦江の西岸に在り。周圍約二里、城門七あり。大東小東小南大南西門老北新北と曰ふ。大東小東及新北の三門内ハ城内の大街にして、頗繁昌の處と云。然れども、街衢狹隘にして、汚穢を極め、通行するに、臭氣堪ゆべならず。道臺衙門ハ、大東門内に在り。知縣衙門ハ、小東門内に在り。而して上海の貿易ハ、悉く外人居留地に在り。縣城内の商賈ハ、唯若干の雜貨を零賣するに止まるのみ。然れども、支那特有の物産及製造品を求むるハ、城内を便且廉なりとす。



上海の街市

居留地ハ、縣城東北の郭外に連あり、分ちて英租界、佛租界、美租界の三區と爲す。英租界ハ、其區劃南ハ洋涇浜河ふ始まり、北ハ吳淞江、蘇州江畔に達し、東ハ黄浦江を境とし、西ハ吳淞洋涇浜二水を連続する、防禦溝渠に至るの間とす。其廣袤殆一英里にして、縣城の郭



壁を距ること凡半英里に在り、之を上海居留地中最繁榮の區とす。市區整然、往來利便、家屋の構造頗壯麗を極む。歐米の大都に比するも、三等都府に下らばと謂ふ英國領事館、米國領事館、公園地、寺院、學校、警察署、劇場等、皆備をらざる處となく、宛然たる歐米の都會あり。本邦人の設立するものあり、三井物産會社、樂善堂、修文館、日清貿易研究所等、本租界に在り。

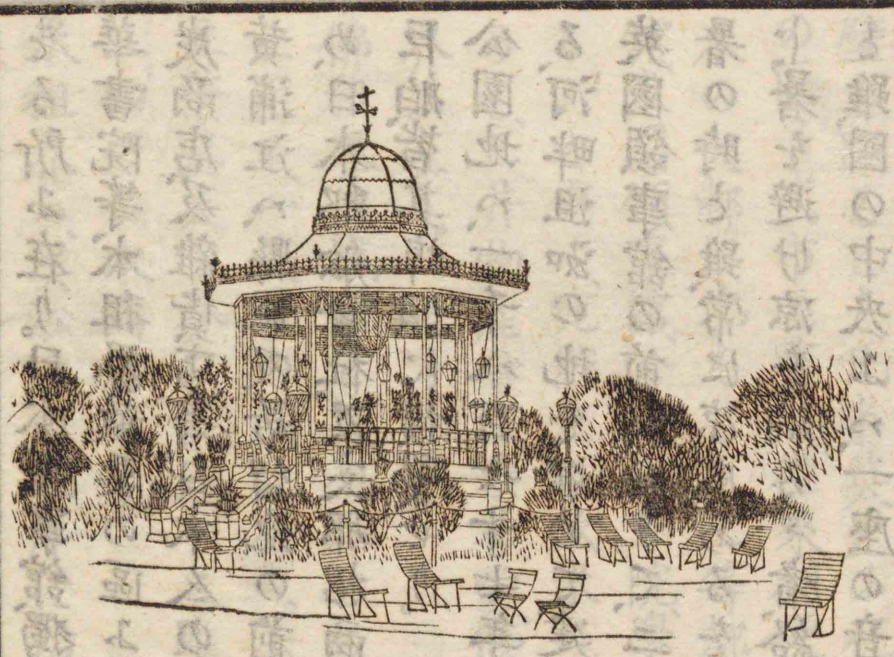
佛租界は、城壁と英租界との間、及洋涇浜より南、小東門溝に至る、一英里の間に在り。法界警察署、法國領事館等あり。其繁盛英租界に及ばずと雖、商業亦隆昌あり。廣業洋行等三四の日本商店あり。

米租界は、吳淞江の北岸に沿ひ、黃浦江に臨みて、虹口と稱

をる所も在り。日本領事館、獨逸理事府、及日本郵船會社、米華書院等、本租界最要の區も在り。其他、本願寺別院、三菱石炭商店、及雜貨店等、日本人の居住をる者、此地に多し。黃浦江は、縣城及居留地の前面を流れ、英佛獨の郵船を始め、日本郵船會社、及支那招商局の汽船等、三四千噸の大船、巨舶、皆其埠頭に横繫せり。

公園地は、一千八百七十七年、黃浦、吳淞、兩水の交會點に在る、河畔沮洳の地を埋めて、建設したるものにして、英租界英國領事館の前に在りて、二面江に臨み、風景絶佳あり。極暑の時と雖、常に涼風あるを以て、夏季に至れば、斜陽に乗じ、暑を避け涼を納る者、絡繹絶えず。其規模甚大ならずと雖、園の中央に、一座の音樂堂あり。近年の改築に係り、



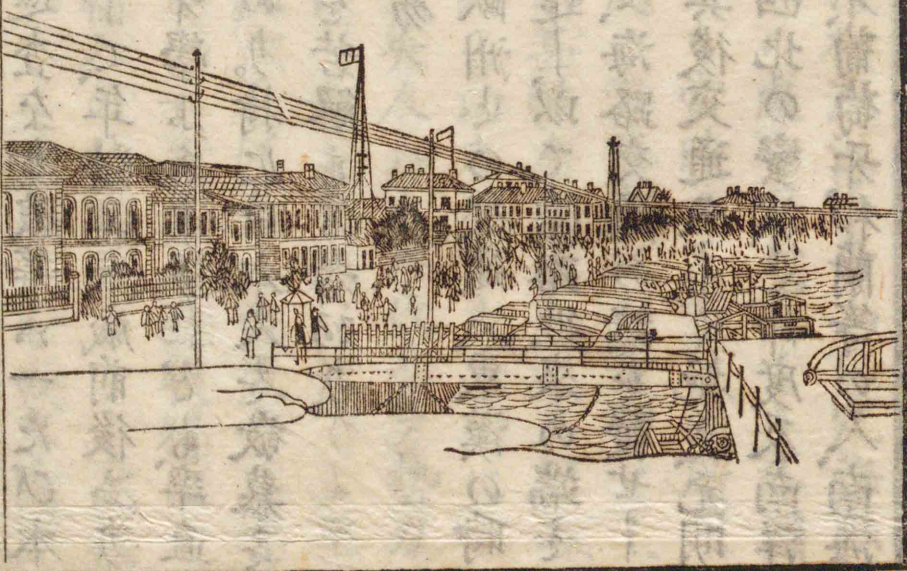


上海の公園

毎年五月より十月末に至るまで、樂隊音樂を奏し、居民の以て無上の娛樂とせり。是を以て、三伏の候に至れば、老幼男女群を爲して、立錐の地なきと、往々是あり。此園は、北京の圓明園に象りを以て、或は稱して圓明園と曰ふ。其經費は、居留人一般の負擔にして、賤の別なく、皆行て樂む可

し。獨支那人の、其費用を出せと雖、行て遊ぶおとを許さざりしを以て、物議少あらざりしが、明治二十三年十二月、遂に蘇州江畔に沿ひて、別一の公園を設け、主として支那人の遊覽に供せり。上海の埠頭に上陸する者、七八尺の大漢頭に紅布を纏ひ、腰に棍棒を提げ、嚴然として佇立せる

上海の埠頭





を見ん。是即居留地警察の印度巡查なり。彼等ハ一たび本國に於て、兵役ヲ服したる者にして、年齢二十歳前後ありと雖、一見三四十歳の人の如し。才學ハ乏しけれども、率直真摯にして、又極めて腕力に富めり。特に日本人を敬慕する氣風あり。往々ふして日本語を苦解する者あり。

第五章 支那の外國貿易

支那國の四隣に通ざる久し、其歐洲との交通ハ、東漢の時より始まれり。當時使節を羅馬に遣し、以て陸路往來の端を開き、羅馬の使節亦方物を致して、海路交通の緒を發せしハ、蓋今より一千年の前に在り。其後交通久しく絶え、元明以前、外國の支那に通ざるもの、西北の蠻族と、印度及南洋諸國のみ。明の中葉に方り、西班牙、葡萄牙、和蘭等の人、南海

に來り、互市するもの漸く多く、清初浙江省舟山に定海縣を設置し、城外に埠頭を設け、互市の處と定む。是より各國の商船多く此に集まれり。然れども當時の互市は、尚廣東の一處に過ぎざりしを以て、該處の海關吏之を奇貨とし、名を構へ目を設け、定税外の徵求甚酷なり。商人之ハ困み、屢清廷に訴へ、其矯正を乞ふも、終に功をかりき。此時に方り、西班牙、葡萄牙、和蘭ハ漸く衰へ、英人ハ之に代りテ勢力を占め、東洋通商航海の權を專にし、意を支那に注ぐに至れり。然れども廣東の互市、尚未盛ならば、吏人の徵索益甚し。殊に支那商の貿易を以て業となす者、其人最狡猾にして、英商皆之に困めり。初阿片烟輸入の禁甚嚴なりしが、後其禁漸く弛み、英商の廣東に來りて互市するもの、專阿片



烟の輸入を首とし、其弊甚し、政府之を患ひ、阿片輸入嚴禁の命を布き、特に林則徐を差して、便宜事に従はしむ。則徐乃廣東に抵り、嚴に販烟を禁じ、英商の蓄ふる所の阿片を没入して、悉く之を焚棄し、遂に阿片の五市を禁ず。是に於て阿片の變あり、英人の一戰、廣東を陥れ、再戰して香港厦門を掠し、更に長江を溯りて、鎮江を占め、破竹の勢を以て、江寧に通る。清廷防ぐべからざるを知り、遂に償金二千一百萬兩を與へ、及香港を割讓し、且通商海口五處を開いて和を講ぜり。之を道光二十二年の江寧條約と謂ふ。後數年、廣東の小吏、擅に英船を在りし清民を捕拿したるより、再釁隙を開き、佛國之に連合して、天津を陥れ、北京に通る。清廷復和を求め、償金一千二百萬兩を出し、且七處の

通商港を開く。之を咸豐十年天津條約と謂ふ。

廣東の一敗、五港を開き、北京の再敗、七港を開き、海禁遂に撤せり。其公開せる貿易港は、二十五あれども、日本人が通商の權を有する者は、其中の十五港のみ。即上海、鎮江、漢口、九江、寧波、天津、牛莊、芝罘、福州、厦門、仙頭、瓊州、廣東、安平、淡水是あり。

支那各港の貿易額は、開港の後、幾あらばして、二億餘萬兩の上より出で、爾來逐年増加して、明治十八年より、既に二億八千萬兩に達し、後四年を経て、凡三億八千餘萬兩上れり。之を我が錢貨に改算すれば、實は五億八千餘萬圓の巨額となる。故に海關稅は、支那政府の一大財源とあり、其歳入中、田賦を除くとき、能く之より及ぶ者なし。



支那物産の種類甚多し。其輸出品の重なる者ハ茶、絲、綿、毛皮、豆、麝香、大黃、砂糖、蠟、漆、油、菓物等にして、皆益盛大に赴く勢あり。就中茶、絲、綿、毛皮、藥材、砂糖、豆、蠟、油の數品ハ産額及利益の最大なる者なり。又輸入の重なる物品ハ阿片、金巾、石炭、石油、燐寸、硝子、毛織物、銅、海産物等にして、就中洋布即金巾ハ支那産の木綿より比し價賤しくして品質良あるを以て、年々其需用を増加し、今や毎年の輸入、四千三百餘萬兩、即我が六千五百餘萬圓の多きに達せり。又阿片に至りてハ、貧富の別なく、之を嗜む者多く、近來内地に於ても大に其生産を増加するも拘ららず、其輸入額ハ尚毎歲三千四百三十餘萬兩の多きを見る。支那人の烟毒に罹り、精神氣力を消失する者、歳々擧げて數ふべからば、之の爲

に、寶貨ハ外る流れ、元氣ハ内よ耗き、實に支那の大害と云ふべし。現今我が日本の貨物の支那に輸入する者、僅に一千萬兩、左右に過ぎず、支那より之を觀れば、猶九牛の一毛の如し。是さへ我が國人の直輸入に係る者ハ、僅に其廿分の一にも達せぬ。故に後來我が商人にして、進みて日清貿易の擴張を圖らば、必だ大に進歩を見るべとならむ。

### 第六章 一家の經濟

茲に人あり、一年に五百圓の所得ありて、其消費する金額四百五十圓なれば、其入る所の出づる所より多くして、誠に安全あるべし。然れども其消費の金額五百五十圓あるときハ、費す所の得る所の額に超え、歳末に至り、會計意の如くあらば、必不幸の境遇に陥るべし。世人ハ皆明に此道



理を知れども、知り易き道理は、却りて之の實行を怠り、畢竟之を知らざるも、同トき結果あるの、悲しむべき事あらむや。抑消費の額、所得の額より多ければ、必貧苦に陥り、家産を傾くるに至るおとひ、火を覩るよりも明よりて、安穩に世を送らんとせば、其所得の内、に於て、生計を立つべき苦なるも、世より往々不相當に消費して、看るく、貧苦の悲境に陥る者多し。の、る人の、自求めて破産零落を致し、おら、貧苦に耐ふる力の、甚弱き者あり。故に一たび貧苦に迫れば、直し他人の憐れを求めて、返すべき目宛もなき借金を爲し、借金に借金を重ね、遂し身を措くに處なきやりにあるべし。抑不注意の消費を爲せば、貧困に陥るべしとの掛念なき者のあらば、克己の力強き人の、此掛念あるが爲に、

勤勉して錢を得、節儉して貯蓄をせんと、其力弱き人の、此掛念ありと雖、眼前の誘惑に勝ちて、節儉をるおと能はず。金を蓄積して、生計を安樂にせんとの望はあれども、後來の安樂を得んお爲に、今日の安樂を抑ふる勇氣を有せず。安樂を享くべき時の、未至らざるに、早く既し安樂を受けんとし、富榮の時の後日に在るも、既し其眼前に來れる如く想ひ、現在の生活を爲るにも、既し得たる金を以てせば、して、將に得んと欲する金を以てするも至るべし。かゝる人の、實し世の厄介者と云ふべし。されば、人の平生に於て、相當の餘財を貯蓄し、資本を有益の道に用ゐ、後日繁劇ある職業を退き、安樂し一生を送らんと、心掛けざるべあらむ。翌年の収入に増加あるべきを料り、今年の消費を多く



まべあらば。將來の結果をも思慮せず、其資力に不相應なる生計を爲して、産を破る如き愚に陥らざるやう、心掛くべきなり。

故よ人の宜しく己の所得の幾程あるかを確知せることを務むべし。己の所得の幾程のほるべし、若くは幾程とあるべし、など、豫想し、漠然たる思想を以て、不精密ある計算を立つべからば、世の業を敗り産を倒をも、多くの此漠然たる思想を誤らる者なればなり。殊に商人の、其計算を精密にして、出費の額、貨物の原價、販賣の高等を明白にせしむべし。斯くすれば、能く其出費をして、資力の分限に應ぜしむることを得べし。

所得の性質を知らざるべあらば、例へば、給料に依て生計を立つる人の、其翌月或は翌年に其給料を減せられ、若くは職を廢さるゝとありと云ひ難し。かく其連續の確實ならぬ所得の、連續の確實ある所得に比せれば、其性質大に異あり。其一部の之を消費の資と爲すべきも、一部の其所得の減せられ、若くは廢せられたる時の準備として、之を貯蓄し置かざるべあらざる者あり。故に現在の所得高を以て、生計の標準と爲すべきにあらば、人々能く前に述べたる所の旨を守りて、生計を立つるときは、家産の始めて安全なるべし。然らざれば、大抵貧苦の境に陥るべし。を免れ難し。要するに、平生一家の經濟に注意し、少の餘金をも貯蓄し置くやうに心掛くれれば、其金額は、漸く多く







らびと以へるとのくも昇平世界文明の盛代に生きたる  
年を暮らさよ送りし人の希と所あるよゆく水く囚とお  
なりたりををさるるを詳しきさる人ふい味り一罪科を積  
みらんおと唱へらさ生ゆる死母の更あり親族朋友送る  
辱をうけしめんい實よ堪えざる事と存故地頼末を記し  
指しげゆるい己の境ふい面會しりい話下さきか

字解

春臺 春日高臺ニ登リシ如ク安  
樂ニ家居スルヲ云フナリ

注意

高野長英ハ奥州水澤ノ人ナリ和蘭ノ醫術ヲ修ム天保中  
罪ヲ獲テ幕府ニ捕ハル後亡命スルコト數年遂ニ自殺ス

第八章 安井仲平ノ東遊ヲ送ル序 鹽谷宕陰

嘗テ當今ノ學徒ヲ觀ルニ其庠校ニ在ルトキハ孜々トシ  
テ勤苦スル者アリ。庠ヲ退クニ及ビテハ則倦ム。庠ヲ退テ  
倦マザル者アリ。妻子ヲ畜フルニ及ビテハ則衰フ。妻子ヲ

安井仲平



畜ヘテ衰ヘザル者アリ。禄位ヲ  
獲ルニ及デハ則廢ス。禄位ヲ獲  
テ廢セザル者アリ。一患ニ逢ヒ  
一災ニ嬰レバ則挫ク。蓋其庠ヲ  
退テ倦ム者ハ其志小ナル者ナ  
リ。妻子ヲ畜ヘテ衰フル者ハ其

器狭キ者ナリ。禄位ヲ獲テ廢スル者ハ其意滿ツル者ナリ。  
一患ニ逢ヒ一災ニ嬰テ挫ク者ハ其氣剛ナラザル者ナリ。  
吾當今ノ學徒ヲ觀ルコト衆シ。其能ク庠ヲ退キテ倦マズ  
妻子ヲ畜ヘテ衰ヘズ。禄位ヲ獲テ廢セズ。災患ニ逢テ沮マ  
ズ。挫カザルコト我ガ安井仲平ノ若キ者ハ未多ク觀ザル  
ナリ。仲平ハ飮肥ノ人。眇然タル小丈夫ニシテ。狀寢陋ナル



コト甚シ。歳ノ甲申、來テ昌平學ニ入ル、居ルコト三年、矻々トシテ少シモ懈ラズ。書ヲ讀ムヤ、眼紙背ニ透ル。識慮高卓、議論人ノ意表ニ出ヅ。予深ク之ニ畏事セリ。郷ニ歸ル後モ、歳ニ數次ハ、必書ノ至ルアリ、大率激憤慷慨、僻壤師友ニ乏シキヲ以テ言ト爲ス。其藩士ノ東ニ來ル者、僉云ク、仲平少時孤介ニシテ、人ヲ容ル、ニ短ナリキ、今ハ則直ニシテ、平方ニシテ、恕、衆ニ接スル諧和、長ニ事フル禮アリ、闔藩敬信スト。國事ニ參與スルニ至リテ、身ヲ致シテ公ニ奉ジ、建白スル所、皆時務ニ切ニシテ、著績ノ傳述スベキモノアリ。而シテ講學ハ則益勤ム。間、其君ニ從テ、江戸ニ祇役スレバ、居ル所ノ舍、湫隘樸陋ニシテ、塵埃席ニ滿ツ。而シテ讀書ノ燈、常ニ烟々タリ。時ニ師友ニ從テ、其新得ヲ出セバ、輒即人ヲ

驚カス。戊戌ノ歳、遂ニ官ヲ辭シ、家ヲ挈ヘ來テ、學ニ江戸ニ就ク。居ルコト幾クモ無クシテ、火ニ逢ヒ、資財蕩盡シ。未年ヲ踰エズ、季女又痘ヲ病デ夭セリ。仲平自祿爵ヲ降シ、桑梓ヲ離レ、子然トシテ三千里外ニ僑居ス。竈突未黔マス、累ネテ不虞ノ難、人倫ノ變ニ逢フ。皆人ノ堪ユル能ハザル所ナリ。而シテ志氣少シモ撓マス、讀書ハ日ニ必寸ヲ盈タシ、作文ハ年ニ囊ヲ以テ計フベシ。齡五十二、垂トシ、俛焉トシテ、刻厲シ、頭ノ將ニ蒼ナラントスルコトヲ知ラズ。此豈今世ノ士ナランヤ。仲平心計ニ巧ミナリ。自言フ、吾數術ニ於テハ、學ハズシテ能クスト。予ヲ以テ之ヲ觀ルニ、其天ニ稟クル者、智ニ於テ特ニ深キナリ。古人云ヘリ、性敏ナル者ハ、多ク學ヲ好マズト。仲平ハ最敏ノ質ヲ以テ、學ヲ嗜ムコト、食



色ヨリモ甚シ。故ニ格致日ニ新ニ識度日ニ躋ボル。家ヲ治  
ムルニハ善ク出入ノ計ヲ審ニシ、不虞ノ變ハ之ヲ待ツニ  
備アリ。推シテ邦國天下ニ至ルマデ其利害得失ニ於テ確  
トシテ成算アリ、咸ナ施行スベシ。之ヲ今世ノ士ニアラズ  
ト謂フハ譽ニアラザルナリ。予ハ賦性鈍ニシテ、百事皆拙  
シ。而シテ算ニ於テ最暗ラシ。故ヲ以テ産ヲ治ムルニ檢ナ  
シ。終歲拙々トシテ精神殆耗ス。妻孥ヲ有シテヨリ、業日ニ  
退クヲ覺ユ而シテ君ニ事フル無狀、未涓埃モ國ニ益スル  
コト能ハズ、居恒仲平ヲ觀テ以テ自勵メリ。然レドモ惟其  
終身及ブコト能ハザルヲ恐ル、ナリ。今茲季夏仲平、ハ彌  
河ヲ濟リ、日光山ニ登リ、還テ北總ヲ軼ギ、水府ニ游ビ、名公  
賢佐ノ經綸スル所ヲ觀、然シテ後、東陸奥ニ入り、金華、ハ彌松洲

ノ勝ト、衣川高館ノ陳蹟トヲ縱覽シ、其意氣ヲ壯ニシ、以テ  
益進學ノ資ト為サント欲ス。其人ヲ驚カス者、將ニ滋測ル  
ベカラザラントス。嗚呼、畏ルベキ哉。

**字解** 桑梓 故郷ノコト 詩經ノ維桑與梓 必恭敬止云々ヨリ出ツ 狀寢陋 寢ハ寢ト音通ニシテ醜ナリ乃容  
貌ノ惡シキヲ云フ

第九章 兄弟の友愛

友トハ兄弟のあかよきをいふ。抑我グ身の大恩を受けた  
る父母に次ぎて親きハ、兄弟なり。兄弟ハ、父母の骨肉を分  
ちたるものなれば、兄ハ弟を愛シ、弟ハ兄を敬ヒ、相親ミ、相  
睦ミテ、喧嘩口論せざるハ、いふまでもなく、互に助け助け  
られて、同ドク親に事へて孝をつくり、共に君事奉り奉り  
て、忠義を勵むべきハ、兄弟の本分と云ふべし。姉妹の間も、



よと兄と妹、姉と弟の間も皆おれよ同ドと心得べし。實に兄弟ハもと一體の分れたるものなれば、父母の亡き後、その財産などを分ち受くるにつけても、互に相争ふ如きおとほるべからば、餘あるもの、足らざるものを助け、富めるハ、貧しきを救ひて、共よ世よ立つをこそ、兄弟の情義といふべし。さるを財産の争よりして、兄と弟との裁判所に出で、理非の公判を仰ぐやうの事も、偶世間に聞ゆるハ、左の手を以て、右の手を切り、右の手を以て、左の手を割くが如し。誠おほさましき心といふべし。あつる人の、兄弟相親み、和睦むときハ、其間よ天然に無上の樂ある情を知らぬがゆゑあるべし。おの境界を知らば、徒に慾にのこ迷へるハ、夢を見て猶醒めざる人の如し。この情を知

きる人より見れば、或ハ惡み、或ハ笑ふおとあらん。論語にも兄弟おハ怡かたりとあり、怡々とい悦び和ぐ事にて、心中よりあふれ出で、言語容貌の間よまで、いふべからざる樂あるをいふなり。

第十章 文學の沿革 (二)

足利氏の末に至り、海内紛亂して、士人の軍事に忙しく、文を修むるお違あらば、字を知る者ハ、唯僧徒ありしのみ。豊臣氏天下を定むるお至り、京師の人、藤原肅始て程朱の學を唱ふ。徳川家康、秀忠、共に文教



藤原肅



を尚び、林信勝を聘して儒官とせり。信勝ハ羅山又道春と號す。徳川氏の制度文物、多く其議に參り、頗幕政を裨補せり。著書も亦甚多し。子孫業を傳へ、孫信篤に至り、大學頭に任ぜらる。朱子學の盛あるハ、林氏ノ力多きに居れり。是より學士躰を接して輩出し、中江藤樹ハ、王陽明の學を信じ、道德を以て世に鳴り、近江聖人と稱せらる。其門人ハ熊澤

中江藤樹



林羅山



了介あり、經濟を以て一世に雄視せり。山崎闇齋ハ英達の資を以て、宋學を稱へ、詞章を事とせず、晩年に神道を唱へたり。木下貞幹ハ初加賀の前田氏に仕へ、後幕府の儒員とあり、順庵と號す。朱子學を宗奉せり。幼にして神童と稱せられ、年十三のとき、太平賦を作れり。學術淳正にして、門人甚多く、新井君美、室直清等、名を成す者多し。君美ハ白石と號す。江戸の人あり。博學卓見にして、政事に暗練す。將軍綱吉、家宣家繼、吉宗四代に事へ、裨益をる所多く、且頗王朝の故典不通せり。朝鮮の使者を

新井君美



了介あり、經濟を以て一世に雄視せり。山崎闇齋ハ英達の資を以て、宋學を稱へ、詞章を事とせず、晩年に神道を唱へたり。木下貞幹ハ初加賀の前田氏に仕へ、後幕府の儒員とあり、順庵と號す。朱子學を宗奉せり。幼にして神童と稱せられ、年十三のとき、太平賦を作れり。學術淳正にして、門人甚多く、新井君美、室直清等、名を成す者多し。君美ハ白石と號す。江戸の人あり。博學卓見にして、政事に暗練す。將軍綱吉、家宣家繼、吉宗四代に事へ、裨益をる所多く、且頗王朝の故典不通せり。朝鮮の使者を



接待して、禮節を論じ、以て國禮を正し、海防を嚴にして、外  
舶の專横を制し、蘭學を修めて、異聞を録するが如き、皆尋  
常學者の及ばざる所あり。室直清も、亦儒學を以て一世の  
名あり。其著書今に至るまで珍重せらる。徳川光圀の、身諸  
侯に列し、學を好み書を著し、學館を建て、以て文教を擴  
張せり。殊に正史を修めて、大  
義名分を明し、たるの如き  
の、其功百世に冠たりといふ  
べし。伊藤仁齋の、漢唐の古説  
を唱へ、蔚として一家を成し、  
其五子皆名あり。長子長胤最  
著はる。貝原益軒の實學徳行



伊藤仁齋



荻生茂卿

を以て著のれ、其著書の、平易  
を主として、教訓を民間に普  
及せり。荻生茂卿の、徂徠と號  
し、性豪宕にして、一世を睥睨  
し、古文辭を修めて、險難の漢  
文を作り、自一家の學を開け  
り。幕府も亦學校を設けて、子  
弟を教育し、學士に命じて書を著し、さしめ、屢城中に於て、  
講義の會を設け、將軍綱吉の如き、自書を講ぶるに至る。  
是を以て上下學術の隆興、復昔日の比よ、あらば、其後、安積  
覺、菅野彦中、井積善、柴野邦彦、賴惟完等、皆文學を以て顯  
はる。惟完の二弟に、春風、杏坪あり。山陽の惟完の子あり。文



幕府學  
問所講  
筵の圖



章一世に冠絶し、著す所の日本外史、日本政記等、盛に世に行はる。尾藤肇、古賀樸、並ぶ幕府の儒員となり、程朱學を興せり。幕府の老中松平定信は、樂翁と號し、博學多才にして力を教化に用る風流文雅一時の推尊を蒙る所となせり。光格帝の如きは、自儒學を好み、常に諸皇子を奨勵して書を讀よとめ給ひしゆ。皇

女に至るまで能く經史に涉らせられき。外交の事起るふ及び憂國の志士輩出し、林子平、高山彦九郎等の奇傑あり。藤田東湖、梁川星巖の如き、慷慨ある文士あり。藤森弘庵の如き、經濟の材あり。賴三、樹三郎、吉田松陰、松本奎堂の如き、忠節を懷きて國事に死したる者あり。而して長野豊山、佐藤一齋、齋藤拙堂、森田節齋、鹽谷宕陰、安井息軒等の皆其學

賴山陽



古賀樸





藤田東湖



術文章を以て世に名あり  
ものにして、現時の漢學家の  
概是等の人々に教育せられ  
し者あり。概言をれば、徳川時  
代の漢文學の藤原肅之を首  
唱し、徂徠之を擴張し、山陽之  
を修飾せり。

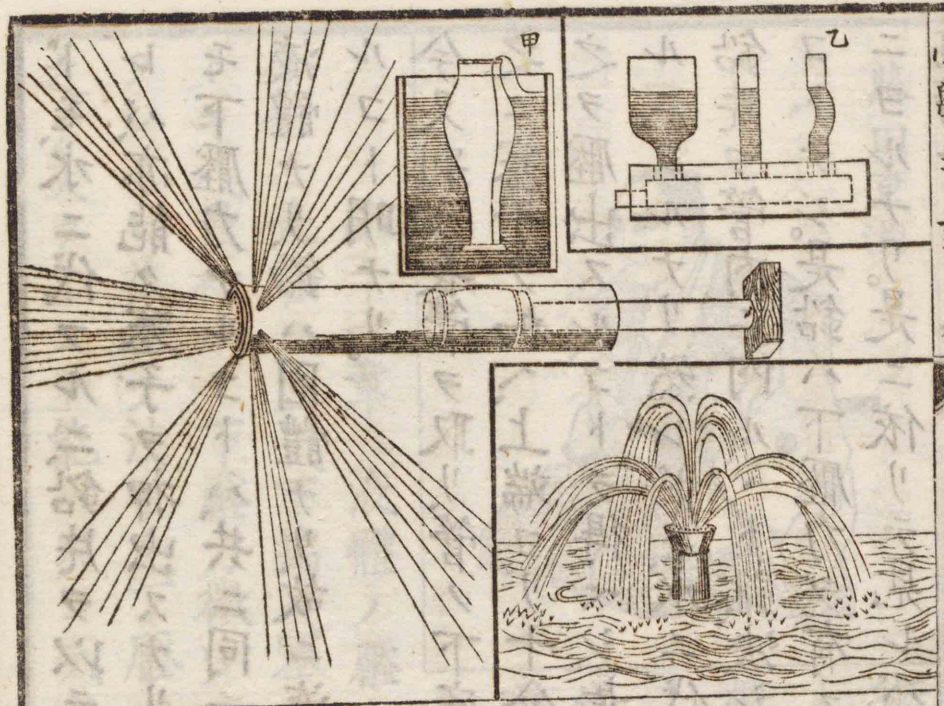
第十一章 液體ノ壓力

今一ノ長管ヲ立テ、下端ニ塞子ヲ加ヘ、上端ヨリ水ヲ注グ  
トキハ、最初水ノ下壓力微小ナル間ハ、塞子ハ能ク之ヲ支  
フレドモ、益水ヲ注ギテ、下壓力ヲ増ストキハ、塞子ハ遂ニ  
之ヲ支フルコト能ハズシテ、水ノ爲ニ押出サルベシ。然レ

ドモ、水ニ代フルニ、鉛片ヲ以テスルモ、其重量水ト同ジケ  
レバ、亦能ク塞子ヲ押出スナリ。是ニ依リテ見レバ、水モ鉛  
モ下壓力アルコトハ、共ニ同一ナルコトヲ知ルベシ。水ハ  
液體ナリ、鉛ハ固體ナリ、故ニ液體モ、固體モ、共ニ下壓力ア  
ルコト明ナリ。

今又別ニ長管ヲ取り、管ノ下底ニ近キ側面ニ、小孔ヲ穿テ、  
之ニ塞子ヲ加ヘ、上端ヨリ十分ニ水ヲ注グトキハ、終ニハ  
之ヲ壓出スルコトヲ得ベシ。是水ニ下壓ニ均シキ側壓ア  
ルニヨルナリ。然レドモ、水ニ代フルニ、鉛ヲ以テシ、十分ニ  
鉛片ヲ管内ニ内ル、ト雖、決シテ側面ノ塞子ヲ押シ出ス  
コトナシ。是鉛ハ下壓力ヲ有スレドモ、側壓力ヲ有セザル  
ニヨルナリ。是ニ依リテ見レバ、液體ハ、側壓力ヲ有スレド





モ、固體ハ之ヲ有セザルナ  
 リ。水ハ唯ニ下壓力ト、側壓力  
 トヲ有スルノミナラズ、亦  
 上壓力カヲ有スルモノナ  
 リ。今上下共ニ開通セル一  
 ノ管ヲ取り、其下端ヨリ板  
 ノ如キ物ヲ管口ニ擬テ、絲  
 ヲ以テ之ヲ縫シテ、水中ニ  
 入ル、コト、圖中甲ノ如ク  
 シテ、其手ヲ放ツ時ハ、其物  
 敢テ水中ニ落ツルコトナ

カルベシ。是水ニ上壓力アリテ、下ヨリ之ヲ支フルニヨル  
 ナリ。泉ノ地上ニ潰出スルモ、亦水ノ上壓力ニ外ナラズ。此  
 ノ如キ力ハ固體ノ絶エテ有セザル所ナリ。此ノ如ク、水ハ  
 上下四面ヲ壓スル力アルガ故ニ、土瓶中ノ水ハ、能ク其嘴  
 ニ上リテ瓶内ノ水ト、同一ノ水準ニ位スルナリ。即圖ノ中  
 ノ乙ハ、水ニ此性質アルヲ驗スル爲ニ造レルモノニシテ、  
 三管共ニ硝子ヲ以テ之ヲ製シ、以テ管内ノ水ヲ見易カラ  
 シム。若水ヲ一管ニ内ルレバ、其下底ヨリ流通シテ、諸管共  
 ニ同一ノ高サニ上ルナリ。  
 西洋ノ都會ニ於テハ、一ノ高キ所ニ水ヲ貯ヘ、水槽ヨリ管  
 ヲ引キテ、之ヲ各家ニ導キ、支管ヨリ支管ヲ設ケテ、自在ニ  
 使用シ得ベカラシムル工夫アリ、我ガ國ニ於テモ高キ水



源ヨリ水ヲ引キ管ヲ地下ニ埋メテ之ヲ遠方ニ導キ公園  
等ニ瀆水セシムルノ工夫アリ。是皆水ニ上下四面ニ於ケ  
ル壓力アリテ必水準ニ歸セントスル性ヲ利用シタルナ  
リ。液體ノ壓力ハ固體ノ壓力ニ異ナル性アルコト之ニ因  
リテ知ルベシ。

問答 水ニ下壓力アル例ヲ語レ。 水ニ側壓力アル例ヲ

語レ。 泉ノ噴出スル理ヲ問フ。 上ニ示シタル四圖ニ

就キテ理會シ得タル所ヲ語レ。

第十二章 先哲の書簡 樂翁公の大塚願亭に遺ハシ書簡

おまのあそびにうそは縁取氣丈ふは初免のる圓出度極  
然る此胃ハ出出で殊ふ生日ハ香あども降り登頂も家  
風志——ハ変化あて様よ古原志深く感んつ——ハ

一 夢持痛あもやい高り成さまてまとおあふふあは且不

一 手とりよそ整くは情こせや晩茶よるびあ——て春の妻

一 子あふあう折角はあぬされたてても例の返きたる如の

一 ぶとよてとこのくあ定あるああももは吐——ハ外のふよて

一 嗚——は鬱憂のほろりと存丹心を——ハ——とこのく連々と

一 以り——たるるんあよあう終るん——ハ——くや入るべくた

一 一六結習練練の事実あつた——書名何とぞは認下さるべくは

一 七日盡高先生に禮トハするめいひ返さる下さるべくは

一 一盡高先生ハいつごろ大層へ出でハやああなかり度は

一 一初練録と序まのあふ付文章ニ通事見ふ入是は二三子

一 一と示——ハもの故何とぞは引あ——ハ——ハ——ハ——に成さむ

一 一下さるべくハ何のやくはさるあなくは派別偏し希ハ且



右仲へも下あをくやしてあしもらいおのちへ下げし  
 習少と悪きと枝梧以年山所毛居附成以くしは何  
 れととそをこは注身よは祖諫こする少とそ味あしくしは  
 とあくもしくは他りあし下さるべくし少との義おし  
 つと市割偏よしてよろしくは引取し下さるべくし

一 昨日の約束の書物一覽致度有

一 盗言先生の事ハおとをきするそ語よ絶えし中くもの  
 物とちがひ又も之何りたるふしをば實よ實よ誠を  
 至極よたもそや手限ハそき往へども歸りのるよ戀つ  
 そして花や菊と思惟以年しはあやよは

一 法野の事實しき書ハ之あくし

一 金遠史及小史は史き及ひはや晴陽あどんやつと

いざしし之何りは事や何

一通鑑志を習どり中ハ急慢のほど慈懐よ堪えどしめめは  
 何しし中しきくは附きの者より中入し中事の中誠の明白  
 仗をよべくは習まそは注し下さるべくは事よこと

あつとあを即し般へよろしく仰せ下さるべくは例の乱筆  
 中者お下さるべくは以上

順亭先生

玉洞

注意

玉洞ハ松平越中守ノ別號ナリ、公幕府ノ老  
 翁ヲ稱シ、中タリ、致仕シテ樂翁ト號シタリ。孟齋ハ久保泰  
 雅ヲ稱シ、亭ト稱シ、一橋家ノ儒者タリシ人ナリ。

第十三章 鬼界島物語(一) 源平盛衰記ニ據ル



治承三年正月十日ごろに、丹波少將は、鹿瀬庄を出で上洛都に待つらん人も心元なかるらんとて、急ぎ給ひけれども、餘寒猶烈しくて、海上も痛く荒れければ、浦傳ひ島づたひして、日敷を經つゝ、二月十日比に、備前の兒島と云ふ處に漕ぎ着き給ふ。

判官入道は、東山雙林寺に、昔の山庄の有りけるに、落ち着きて見けれども、留主に置きたりし人もなく、庭ふハ千草生ひかはし、軒にはしのぶも茂りたり。荒れたる宿の習にて、事問ふ人もなく、板間に苔むして、月の光も漏らざりければ、

ふるさとの軒の板間に苔むして  
おとひしよりともらぬ月のあ

紫野に有りける七十有餘の母の許へ、急ぎ斯くと申したかりけれども、身にそへる下人もなく、昨日は夜ふけて都へ入りぬ、程は遠し、明るを遅しと待ちけるが、同トき十七日に、人を語らひて母がもとへぞ遣はしける。法勝寺の執行俊寛は、此人々を捨てられつゝ、島の柵守と成りはて、事問ふ人もなかりける、僧都の當初世にありし時、幼少より召し仕ひける童の三人、栗田口邊に有りけるが、兄は法師ふなりて、法勝寺の一の預あり。二郎は龜王、三郎は有王とて、二人は大童子なり。有王我主の事、何れ成り給ひぬるやらんと、覺束なく思ひて、此人々の迎ひに行きたりける。人も逢ふて尋ね聞けば、二人も捨てられて、歎きかなし給ひし事、二人舟に乗り



給ひし小艇不取り付きて、遙く出で給ひたりし事、陸に歸り上りて、濱の砂に倒れふし給ひし事、委しく語り答へければ、有王涙を流して、さては未此世に御座するふこそ、誰育み、誰憐み奉らんと、悲しくて、有王は只一人都をあくがれ出で、未知らぬ薩摩瀧硫黄島へ、遙々ところを思ひ立て、先奈良に行き、僧都の姫の御座しけるふかくと申して、御文を賜はりけり。

唐船の纜は、四月五日に解く習にて、有王は、夏衣たつを遅しと待ちかねて、卯月の末に便船を得、海人が浮木不倒れつゝ、波の上に浮ぶ時は、波風心不任せねば、心細き事多かりけり。歩を陸地不はこびて、山川を凌ぐ折は、身瘦せ足泥れ絶え入ることも度々なり。されども、主を志みて行く程

に、日數も漸く積りければ、鬼界島にハ渡りにけり。此島の擧動都にて傳へ聞きしよりも、まのあたり見るは堪へて有るべき様あり。峯には燃え上るほむら、行客の魂を消し、谷不は鳴下る雷、旅人の夢を破る、山路に日暮れぬれども、樵歌牧笛の音もなく、海上に夜を明せば、松風白波心をいたましむ、童何事につけても、慰む思ふければ、いかたすべしとも覺えざりけれども、主の行末のかなしき不谷に下りて尋ぬれば、岩もる水不袖しぼれ、峰に上りて求むれば、松吹く嵐ぞ身不みける。鬼不も角不も叶はねば、只涙を流して立たりけり。さる程に、島の住人と覺しくて、木の皮をばねかつらとして、額不巻き、赤裸不てむつきをかき、身には毛太く長く生て、長ハ六七尺許なる者ぞ遇ひたりけ



る。有王嬉しくて云ひけるは、此島に法勝寺の執行僧都の御房おはし候なるは、何處ふて候やらんと問ひければ、打見たる許にて、物も云はざりけり。法勝寺とも、執行とも、いかでか知るべきなれば、答へざるも理あり。せめては死給ひたりとも、其骸骨はおをすらん、彼をなりとも尋ね得て、形見ともするあらば、いか許り限なく志のかひもあるべきふ、御ゆくへをだふも知らずして、空しく都へ歸り上らんことの悲しきよと思ふ、猶深く山邊に尋ね入りたれども、我主不似たる人もなし。立ちかへり、遙浦路に迷ひ出でたれば、磯の方より動き來る者有り、只一所に動き立つ様あり。其形を見るに、童のとすれば、年若い其貌にあらず、法師かと思へば、又髪はそらざまふ生

え上りて白髪多し、銀の針を立てたるが如し。萬の塵や藻屑の付たれども、打ちをらはず、頸細くして腹大きに脹れ、色黒うして足手細し、人にして人ふ似ず、左右の手に、小き生魚を二三づゝ把り、腰のまはりには、荒和布を取り纏ひ付けて、さけびきて、凡そ力もなげなり。童思ひけるは、哀れ我主のかく成り給ひたるふもやあるらん。近づきよく見れば、手も足もさすが人ふはたがはず、都にも老い衰へたる者もあり、片輪なる人も有り、されば此島にもかゝる者も有るふこそと思ひて、問ひければ、や、一年此島へ、三人流され給ひたりし人の二人は免されて上り給ひぬ、今僧の一人おたすなる、いづくふぞと云ひければ、僧都は顔こそ衰へたりけれども、目と心とは



昔にかはらば、童をば、慥に我召し仕ひし有王とぞ思はれける。童は主の餘り、公衰へ損ふたれば、僧都とは知らざりけれども、さすが又何とやらん覺えて、つくづくと守り立ちたり。僧都は顔の色をとかく變じて、様々ふを思ひける。我こそ俊寛よと名乗らんとすれば、果報こそ拙くて、かゝる身とならんからに心さへかはりけるよと思はれんことも愧づかしく、耻を見んよりは死をせよとこそ云ふに、さこそあらんからに僧形として生魚を手に把りたる心うさよ、只知らざる様にて過さばやと、千度百度案じけるが又思ひけるは、此島ふては疎く知らざる者なりとも、都がかりの人に逢ひたらんは、うれしく珍しかるべし。況や年頃主をかなしみて、遙々と尋ね來たらん者を、其志を失ひ

空しく返すのぼせんこと、いと不便なり、我もまた問ひきたきことも多しと思ひ返して、手に把りたる魚をば後へ廻しざりげなき様に投げて、おれは有王かいかおして是までは尋ね來れるぞや、我こそ俊寛よ、穴珍しや、己一人を見たれば、捨て別れし妻子も、住みなれし古郷も、皆見つる心地するぞや、いかにとて、手すり足すり喚き叫びけり。

有王は、流す涙せきあへず、僧都の前に倒れふし、良久く物も云はず、扱も老いたる母を見ず、親しき者も知らせずして、都を出で、遙の海路を漕ぎ下り、危き浪間を分けし、のぎ参りし、縦疲れ損ふ給ひたりとも、斜なる御事にこそぞ存ぜし、三年を過ぎし程は、さすが幾ばくならぬ



日數にこそ侍るに、見忘るゝほどに衰へさせ給ひける口  
惜さよ、日頃都にて思ひやり進らせけるは、事の數ふても  
侍らざりけり、まのあたり見進らす御有様、うつゝとも  
覺え候はず、されば如何なる罪の報ひて、かく渡らせ給ふ  
らんとして、僧都の顔をつくぐと守りつゝ、さめぐとぞ  
泣きふしたる。

字解 むつき 強褌トテ小兒ニ用キル衣服 斜ふる御事 大抵知レタコト、云フ

第十四章 鬼界島物語 (二)

童良有りて起きあがりければ、僧都もまた起きなほりて、  
泣く／＼宣ひけるは、此島は遙なる海中、遠き雲の外おれ  
ば、おぼるげふても、人の通ふことなし。己が兄の龜王が、淀

まで訪ひ下りたりとをこそ、有難く嬉しき事と思ひしに、  
有王が是まで思ひ立ち見え來る事實に現とも覺えねば、  
若夢にてや有らん。やをれ、有王さらば、中々いかふ悲し  
からん。そも戀しき者を見つれば、嬉しなどは、云ふも疎な  
り。さても少將と判官入道との有りし程ハ、憂き事、悲しき  
事、いひつゞけては泣きつ、思ひ出で、有りし昔物語をい  
ハ、笑ひつ、互に慰みしふ、打ち捨てられし後は、一日片時堪  
へて有るべしとも覺えざりしふ、甲斐なき命の存へて、互  
に相見つる事の嬉しきよ。加程の有様ふれば、何事を思ふ  
べきにあらねども、都に残り留りし者どもの、忘るゝ間お  
く、戀しく聞かまほしけれども、心お任せぬ旅なれば、それ  
も叶えず。是程の志の有りけるに、などや此三年までハ、問



はざりけるぞ、少將の迎の時は、如何と文一つは傳へざりけるぞ、と宣ふ。童申しけるは、事も愚におぼしめしけるか。君西八條殿へ召し籠められさせ給ひし後は、御あたりの人をば上下をいはず、搦め捕りて獄舎に入れられ、家財も壞り取りしかを、恐をなし、近習の人々も、思ひくくし落ち失せぬ。北の方も、鞍馬の奥大悲山に忍ばせ給ひしが、明けても暮れても、御歎き淺からず見えさせ給ひし程に、其積みや、日頃惱ませ給ひしが、去年の冬、遂に隠れ御座ましぬ。と申しも果てぬふ、僧都は、あな哀れや、さてハ、女房は、早はかなく成り給ひけるこそ。慰む便もなく、知れる人もなき我たにも、かゝる島の有様に、三年の今までも、あるぞかし。さきがは、人におさなき者ども、あまたありき。我を見

るとも思ひなきてこそあるべきに、若や姫をば、誰が浮めとて、隠れ給ひけるぞや。それお就けても、灘面かりける。我命かなとて又卧し倒れ給ひけるに、有王泣くく重ねて申しけるは、若君は、父の渡らせ給ふなる所は、何所やらん、尋ね參れと仰せ候ひしかども、故北の方の、穴賢をなたの方と知らすな。少き心に走り出でゆくへも知らず失する事もこそと承りしかば、知らせ進らす人も、候はざりし程に、人の煩ひ合て侍りし、疱瘡と申す御勞に、去ぬる五月に、又失せさせ給ひふきと云ひければ、僧都又卧し倒れて、やをれ、有王、今はかゝる憂き事をば、お語りそよと、三人が中お法師一人捨て置られぬれば、都にかへり上り、再妻子を相見る事はよもあらんと



ひやれば慰むこともあるにや、いつを限り惜むべき身  
からねども、此を聞き彼を聞く、絶え入りぬべき心地  
あり。よし、今はな語りをもいひけるこそ、せめての事と  
哀なれ。

有王申しけるは、姫御前は、奈良の姨御前の御許に、御渡り  
と承りて、参りて、此島へ思ひ立ち候、御言傳やと申し入れ  
て候ひしかば、端近く出でさせ給ひ、斜ならず御悦ありて、  
あなれ、女の身程、甲斐なき事はあらじ、我身も父の戀しさ  
は、己にや劣るべき。類ふべき方あり。思ひ立つべき道から  
ねば、かおし。さても多き人の中ふ、一人思ひ立つらん、嬉し  
さよ、平らかに参り着きたらば、進らせよ、とて御文あり。御  
詞には、かはりぬる世の恨に、筆の立ち所も、覺え侍らず、泣

く、申し候へば、文字もさだかおらず、御覽下悪くこそ  
渡らせ給はんずらめ、御返事をも、待ち見進らせば、いかば  
かりかはと申せとこそ、仰せ候ひしか、昔ならば、かく直に  
承るべしやと、哀に思ひ進らせて、落つる涙を押へつ、奈  
良を出で、まかり下りし程に、門司赤間の關より、始めて硫  
黄島へ渡ると申す者をば、怪しめ、文などや持ちたると、求  
め搜ると承りしかば、御文をば、本結の中に結びこめて、有  
り難うして、持て参りたりとて、取出して之を奉る。僧都は  
悲しさの中ふも、嬉しく、珍しく思ひて、涙を押拭ひ、押し  
拭ひ、披き見給へば。

其後、便なきみち、子と成り果て、はゆくへをも、承る  
便もなし。身は有様をも知らせ進らせむ、いぶせさのみ



積きども、此中かきくらしめて、晴るゝ心地かく侍り。さ  
 ても、三人同ト答とて、一盃も移されける。二人は免さ  
 るゝに、なごや、御身一人残り留まり給ふらんと、人しれ  
 ぬ歎たゞ思召しやらせ給へ、人々島へ流され給ひて後、  
 其ゆかりの者をば、尋ねお免て手足を換して、着衣問ふ  
 べし。あど、穿え侍りしらば、召し仕ひし者ども、遠く國  
 國へ落ち失せて、舊里に一人も留まらざれば、都には草  
 れゆかりも枯れとて、立ち給るべき方もなく、おは是  
 いと惜しと、事問ふ人もなく。君達も召捕らる可し。あど  
 聞えしつた、母は前弟、我父、三人引き具して、幽なる使  
 ついて、鞍馬の奥とかやに逃ひ入る。日影も思えぬ山里  
 へ、住みも習はぬ柴の庵に、忍び居て候ひし程、朝夕を

此身を此と歎き給ひし、打副ひ、稚き身身の向後、いら  
 にせんと、隙なき物思ひの積みや、病と成らせ給ひた  
 里し、かむ弟と二人、とかく勞り慰め進らせし、かども、叶  
 えぬしを、空しく見成し進らせぬ。生きての別れ、死して  
 此別れ、せん才なげを、二人歎き暮し、泣きあらし侍り  
 し程に、又弟も、疔瘡とかや申を勞として、今年の上月に、  
 身まかり侍り。同ト道おと歎きし、かども、はらなき露は  
 命といひながら、消えもやらで、つれなく、今まで、草の  
 庵に、跡り留りて侍れた、憂き事も、然しき事も、思召し知  
 るべし。拙き果報の程こそ、宿世の身のつとを、免そづか  
 く思ひ侍る。故母御前、毒勞の時、己れ死なむ准を、使と  
 憑し、座ますべき、奈良の里に、姨母と云ふ人、座ます。



尋ね行き、打ちなげかたを去りとも、憐み路はんずらん、と  
 作せ候ひしと承りまきて、嘗時を奈良の姨母の前の由  
 許ふ侍り。跡なるべきるふをあらねど、幽なる任居推  
 しをかり給へ。さて、此三年まで、いふ心つよく、  
 とも無とも、承はらざるらん。母直前も、弟も、後を  
 たのむ方なし。惟ふ預け、いかよせよと、思召まに、疾く  
 して、いふり候へ。戀しとも、恋し、床しとも、床し、三年の思  
 歎き、水茎ふつくし、難く、情を、留まり、借ひぬ。あふかり  
 去あなりしこ

と裏書端書、磁く薄く、みだし書きにぞしたりける。

第十五章 鬼界島物語 (三)

僧都は、此文を見て、巻きつ披きつ、泣きかなしみて云ひけ

るは、俊寛が此島へ流されし年は、姫は十に成りしかば、今  
 年は十二と覺ゆ。文は詞もおとなく、筆の立て所も、尋常  
 なり。されども、切りつぎたるやうに、疾くして上れみづか  
 ら申さんと書きたるこそ、流石雅けれ。心は任せたる道な  
 らば、なすかは、いむもや、或らふべき。墓なきもの、書き  
 やうやとして、聲も惜まず、をめき給ふ。やをれ、有王、此島の形  
 勢にて、今まで俊寛が命のありけるは、姫が文をも待ち見  
 又汝が志の切なりけるふ、今一度見せんとして、神明の御助  
 にてありけるにこそ。已一人を見たれば、都の人々を皆見  
 たる心地こそすれ。かゝる貌、おれども見えぬれば、三年の  
 思も晴れぬ。今はとくく、歸り上り、僧都には、人のつかざ  
 りし、京より人下りて訪ふなど聞えんことも、恐ありと



曰へば、有王申しけるは、あなうたての御心や、これ程の御有様にて、世もおそろしく、命も惜しく、思召し候か。御身のゆるぎ、御詞のいづれは、人と思しめず。唯なまじき骸骨の、動かせ給ひ候ところを見進らせ候へ、と申しければ、僧都我身は云ふふ及ばず、志深き犯さへわれ故に、此島にて朽ちん事の悲しさにこそ、と宣へば、有王涙を流し、老いたる母をも捨て、兄弟にもかくとも申さず、はる／＼と参り侍りし事は、命を君に奉り、身を海底に沈めんと思ひ定めて候ひき。一たび都へ捨て侍る命を、二度此島にて惜むべきか、と申しければ、僧都打うなづきて、嬉しげふていざさらば、我夜の卧所へとて、冥りて行く。

第十六章 夫婦の和

和といふ、順なり。諧ありとありて、妻ハ夫に順ふを以て、和の本とせり。固より人に男女の差別ありて、男ハ剛ふして強く、女ハ柔ふして弱し。是誠に人の常なれば、男にして、女の如くに柔弱なるハ、恥づべく、又女にして、男の如くは剛強あるも、亦宜しからば。さぞと、男の剛強なるハ、貴くして女の柔弱あるハ、劣むりと思ふハ、誤あり。男も人なれば、女もまこと人なり。その人たるふ於ては、男も女も、何の差別あるれあらん。只男の務むべき本分を盡すものこそ、貴き男にハ、女は、女の務むべき本分を誤らぬを優れたる女にはあれ。よく、人よ男女の差別ありて、而して夫婦の道を生ずるあり。さて、夫婦の和順を得んよハ、夫婦の本分を知るこ



と肝要なり。夫婦の本分とは何ぞや、即男女の本分に基く  
あり。前にもいへるが如く、男の身體健にして、氣も剛をれ  
ば自外に出で、種々の事を營む不適し、女の身體弱く、  
て、物事に注意をるゝと細なるものをきば、自家にありて、  
内を治むるに適は。殊に子供を養ひ育つる事おど、全く  
婦妻の任あるべし。是男女相依り、相待つ道にして、貴きも、  
賤きも、かゝるゝとなし。されば夫の婦をまぢ、婦の夫を  
頼みて、始めて、おゝ一家を齊ふることを得るあり。さる  
を世間におゝ間、夫婦の禮を輕んじ、夫おして、妻を犬馬の如  
くに逐ひ使ひ、妻にして夫お順はざるゝのさへありて、は  
て、些細ある事柄より、夫婦の道を破り、年老いたる父母  
まで、おぎりをなく、心を痛ましめ、幼き子供をも、方向に迷は

しむるものなきにあらず。誠にあさましきかぎりあらば  
や。をべて、一家の中におゝ親子兄弟あせども、いづれか、夫婦  
にもとづらざらん。夫婦まづありて親子あり、又兄弟姉妹  
もあるべし。されば、夫婦の家の本なり。本まづ和順せずば、  
いので、家族の和合を望むべき。よして一家の繁榮をや。  
禮記も、夫婦和するゝ家の肥ありとあり。家々肥ゆれば、  
一町一村も肥ゆべく、一國もよと從て富み榮ゆべし。其及  
ばす所廣くまた大ならばや。

第十七章 文學の沿革 (三)

中古以來、漢學漸盛にして、國學ハ稍衰廢の勢を生じ、亂世  
に遭ひて益衰へ、和歌も亦皆浮華に流れ、古歌の面目を知  
る者あまきに至れり。東山帝の朝に當り、浪華ハ僧契沖と云



加茂真淵



荷田東滿と云ふ者あり。古語を講じ、古道を究む。加茂真淵  
繼ぎて出て、東滿を師とし、又契沖の説を參取し、多く書を  
著せり。其古體の文及歌ハ、蓋空前絶後と謂ひつべし。本居  
宣長其門人を以て一生を風動し、長く國學の師とふれり。  
宣長の伊勢の人、博學宏才、古學を精究し、文法を明にし、前

ふ者あり、和歌を善くし、古語  
に通ぜり。曾て博く國語の古  
訓を研究して、和字正濫抄を  
著し、又徳川光圀の囑を受  
け、萬葉集を註せり。是より稍  
純正の國音を知るを得て、古  
學始て中興せり。時に京師に

古未發の説を爲せり。故に稱  
して國學中興の祖と云へり。

本居宣長

其著書頗多けれども、古事記  
傳の如きは、最著明なり。後出  
羽の人、平田篤胤、宣長の學を  
慕ひ、其墓に詣り、誓て弟子と  
なり、大に國學を開弘す。而し



て其該博ハ、宣長より過ぎたり。著書甚多し。其最世に行われ  
て學士に益あるものを、古史傳とふ。篤胤、宣長及真淵を  
併稱して、三大人と云ふ。江戸の瞽僧、堀保己一と云ふ者  
あり。幼にして明を失ひ、人の書を読むを聽き、一たび聞け  
ば記せざるふとふ。遂に洽く國典に通じ、博く古書を訂



平田篤胤



正一、群書類從六百餘卷を編  
に實小前代に絶て無き所  
り。幕府和學所を江戸に建  
保己一をして之を司らしむ  
以上數子の力により、一旦將  
に減んとせし國學再起り、終  
に今日の盛を鳴まふ至れり。

暹羅人ハ年滿二十以上ニ至レバ、一旦僧ト爲ルヲ常トス。

暹羅佛敎事情

其僧ト爲ルニハ、他ニ一大檀越ナカルベカラズ。其大檀越タル者、其人ヲシテ長老ノ下ニ至リ、彼ガ心事ヲ述ベテ、其授戒得度ヲ乞ヒ、而シテ授戒ノ時、及出家以後ニ於ケル、必

要ノ資具ハ、盡ク其檀越ニ於テ支辨スル者トス。故ニタト  
ヘ僧ト爲ラント欲スルモ、之ガ檀越ト爲ル者ナケレバ度  
シテ僧ト爲ス者ナク、且僧ト爲ルニハ、遮難ト稱シテ種々  
ノ僧タルコトヲ得ザル難事アレバ、若我ニ於テ、其難事ナ  
ク、且檀越者アリテ、能ク僧タルコトヲ得レバ、自ニ於テ無  
上ノ幸福トシ、他ニ於テ無限ノ榮譽ト爲スナリ。而シテ其  
僧タル者、畢竟人世ノ義務ヲ免レ得ベキ身分ノ者ハ、敢テ  
論ナシト雖、其然ラザル者ハ、最短キハ一年、其長キハ三四  
年乃至八九年ノ間、僧ト爲ルヲ常トス。即其間佛陀ノ聖戒  
ニ身ヲ制シ、涅槃ノ空理ニ心ヲ鍊フナリ。然ル後、捨戒ノ式  
ヲ行ヒテ俗ニ歸シ、以テ皇帝ノ位ニ昇ルベキ者ハ、皇帝ノ  
位ニ昇リ、以テ大臣ノ職ニ就クベキ者ハ、大臣ノ職ニ就ク



等士農工商各其職ニ服スルナリ。其結果トシテ、世事ニ齷齪タル俗吏家務ニ鞅掌スル賤民ニ至ルマデ多少涅槃空寂ノ妙味ヲ解セザルナキハ、殊勝ノ至ナリ。是豈空ニ住シテ有ニ遊ブ妙意ニ契當スルナキコトヲ得ンヤ。



**字解** 空理 佛敎ニテ空トハ有無ノ迷ヲ離レタル實相ヲ云フコノ實相ヲ悟得セシヲ涅槃ト云フ

第十九章 水ノ構造

白紙ヲ取りテ之ヲ見ルニ、其表面平滑ニシテ、全體一樣ニ見エ、曾テ數多ノ物質、相集マリテ之ヲ結成シタルモノニ

似ズ。然レドモ、之ヲ顯微鏡下ニ置キテ驗スルトキハ、幾多ノ纖維、相重リテ成レル者ニシテ、若高度ノ顯微鏡ヲ用井ルトキハ、其粗キコト、實ニ藁席ノ如クナルコトヲ見ルベシ。之ト同ジク純粹ナル一滴ノ水ハ、清淨、透明ニシテ、全部同一様ニ見エ、其幾多ノ部分ヨリ構造セラレタルヲ見ルコト能ハズト雖、其實幾多ノ細分子相重リテ成レル者ナルコト、白紙ノ纖維ニ異ナラザル者アラン。然レドモ、其分子ハ極メテ微小ナレバ、最高度ノ顯微鏡ヲ用井ルモ、亦個々ノ分子ヲ認視スルコト能ハズ。試ニ顯微鏡ノ用ニ充ツル硝子板ヲ取り、一滴ノ水ヲ點ジ、更ニ其上ニ薄キ硝子板ヲ置キ、之ヲ壓スルトキハ、水滴ハ散ジテ、其厚サ一寸ノ一萬分ノ一トナル。乃最高度ノ顯微鏡下ニ照シテ之ヲ驗



スルニ、依然トシテ同一様ヨリ成レル水滴ノ觀ヲ呈シ、更ニ個々ノ分子ヨリ構成セラレタル痕跡ヲ示サズ。其微小ナルコト、亦以テ想像スベキナリ。更ニ其土ニ於テ、分子ノ微小ナルハ、獨水ノ如キ液體ノミナラズ、固體モ亦見ルベカラザル分子ニ分解シ得ベキモノナリ。今乳香ヲ取りテ、アルコールニ交フルトキハ、溶解シテ乳様液トナルベシ。此乳様液ノ一滴ヲ取り、水中ニ加ヘテ攪拌スルトキハ、水ハ薄キ乳様ヲ呈スベシ。是即乳香ノ分子、甚シク分解シテ、水中ニ瀰漫シタルニ依ルナリ。依リテ其一滴ヲ取り、最高度ノ顯微鏡ヲ以テ之ヲ驗スルニ、更ニ分子ノ如キ者ヲ見ザルコト、前ノ試驗ニ異ナラズ。抑佳良ナル顯微鏡ヲ用井ルトキハ、一寸ノ十萬分ノ一ノ

直徑ヲ有スル固體ナラバ、明ニ之ヲ見ルコトヲ得ベキ者ニシテ、之ヨリ小ナル者ニ於テモ、其性透明ナラザル物ハ、亦彷彿トシテ雲ノ如キヲ見ルヘシ。然ルニ乳香ト水トノ分子ハ、其見ル能ハザルヨリ考フレバ、尚之ヨリ小ナラザルヲ得ズ。

水ト乳香トノ分子ハ、到底今日ノ顯微鏡ヲ以テ、之ヲ明視スルコト能ハザル者ナレド、假ニ細小ノ分子ヨリ成レル者ナリトシテ、之ヲ説クハ、其説ノ事實ヲ説明スルコトヲ得ルノミナラズ、事理ノ然ラザルヲ得ザル順序アリテ、他ニ之ニ勝レル説明ナケレバナリ。之ヲ理科上ノ臆説ト云フ。此ノ如キ臆説ハ、真理ヲ窮メ、事實ヲ説明スルガ為ニ、極メテ必要ナル者ナリ。



字解

乳香

木ノヤニヨリ製シタル藥ナリ

問答

白紙ノ構造ヲ問フ。水ノ構造ハ如何ナル者ナルニベキカ。水ノ最小分子ハ能ク見ルコトヲ得ベキカ。

乳香ノ分子ヲ分解スルニハ如何スルカ。理科上ノ臆

普説トハ如何。

第二十章 朋友の信

信とハ偽り欺のさるおとにして、言語の誠あるをいふあり。凡世の中に慙むべきもの、數多けれども、信ある朋友のなきより、返をれあるハなし。人も一友あくともよとせバ、山の奥海のほとりに、住みいつるも、悔あるべし。さるを、寄りつどひて、都市、町村に住まんことを願ふハ、友あくてハ、かなをぬ事あればあり。風の朝、雨の夕、樂あるも憂あるも、信義ある友をもてるハ、大船にのりたる如きあり。ちをべし。殊よ人の萬能に長ざるものならねば、互に朋友の智慧を借り、よと手をかすること多あるべし。されば、世に出で、一身を立てんとするものハ、必友あくてハ、叶ひおたき道理あり。されども、信義ある朋友ハ、これを得ること、誠にありとせば、一たび信義ある朋友を得たらんに、互に真心を打ち明けて、まことの兄弟の如く、みつきあひ、假初にも、偽り欺くことをなく、互に忠告助言して、疾病患難に遇い、力の及ぶんかぎり、相濟はざるべあらば、是をこそ朋友の貴き價といふをめ。さるに、一旦の怒おまりせて、信義を破り、よとハ、少の慾に迷ひて、日頃のよとを打ちこてるものあるハ、いかみ歎かき、きこのぎりあらばや。



是等ハ皆信の字の意味を知らぬものとや、いふべき。誠に信の一字ハ人間に缺くべからざる、必要のものにして、おれおければ、厚き交際ハ、決して成り立つこと能はば、信なくして世に立たんと思はば、火を焚おきて、湯のにえんおとを望むが如く、翼なくして飛ばんと欲するが如し。

第二十一章 文學の沿革(四)

洋學の原始

洋學の始ハ、邦人と洋人と相接する時お在るべし。而して邦人の洋人と相接することハ、遠く足利氏の末世に在り。其時來航せるハ、葡萄牙、西班牙二國の人にして、之を南蠻

と稱す。其來たれる者ハ、貿易一且宗教を廣むるを以て目的として、邦人の之と交はるは、其武器を求むるに在り。其後洋教の我邦に傳はること愈盛にして、織田信長ハ、之が爲メ京師に南蠻寺を建て、教義を廣めしめたり。此時天文地理、築城、醫藥の事をも傳へたる由おれば、洋學の始とも謂ふべき者なるべし。然れども、此際邦人の洋書を讀みたりしや否、詳あらば、洋教の事の置て論ぜば、天文の學に至りてハ、夙よ之を講ぶる者ありて、正保の頃、長崎の人林吉左衛門、小林義信等即其人あり。吉左衛門ハ、洋教お連坐して刑せられ、義信ハ、其門人なるを以て禁錮せらる。此人ハ、寛文七年に至て赦され、徒を聚めて教授し、來遊せる者頗多かりしと云ふ。其後西川如見と曰へる者ありて、此學に従



事一著書も亦多し。此等ハ西洋天文學の原始あるべし。醫術に至てハ貞享の頃西玄甫、榎林豊重の兩人共に蘭語を能くし、大通詞の職に在る者なりしが、各其餘暇を以て、西洋流の醫術を研究し、殊も外科に巧みなり。其職を辭したる後、玄圃ハ江戸に來りて、幕府の醫官となり、豊重ハ長崎に在りて醫業に従事せり、之を西流の外科、榎林流の外科の祖とす。此外新井君美ハ命を受けて羅馬人に應接し、萬國の地理風俗を問ひ、又和蘭貢使よ就き、羅馬人より聞きし所を質し、西洋紀聞其外の諸書を著したり。大和の人に桂川甫筑と曰ひし人あり、幼きときより、平戸の醫員、嵐山甫安よ從ひて、長崎よ居り、常に蘭館に出入りて、醫術并に言語を習ひしと云ふ。召されて幕府の醫官とあり、尋て

世子の侍醫となり、享保中命を受けて和蘭貢使と對話し、西洋藥品の製煉をなせり。幕府の吏員に、青水文藏と曰ひし人あり、官藏の書籍を司れり。時に將軍吉宗天文の學を好み、和蘭の書籍を覽て、圖畫の細密あるに感し、遂に文藏及野呂元丈の二人に命じて、蘭語を學び、其書を解説せしむ。是より先き、長崎の通詞ハ、應接して事を辨せりと雖、洋教の制禁極めて嚴あるを以て、横行の文字を學ぶふとを得ざりき。吉宗の時よ至り、長崎の通詞、西善三郎、吉雄、幸左衛門等、彼國の文字を讀み習ひ、彼國の書籍を讀むことを許され、彼我の事情一層明白にありて、彼國人に欺かるることあるべしとて、其許可を願出でしに、允許を得たり。和蘭通詞の蘭書を讀み習ふふとの始なり。此時西善三

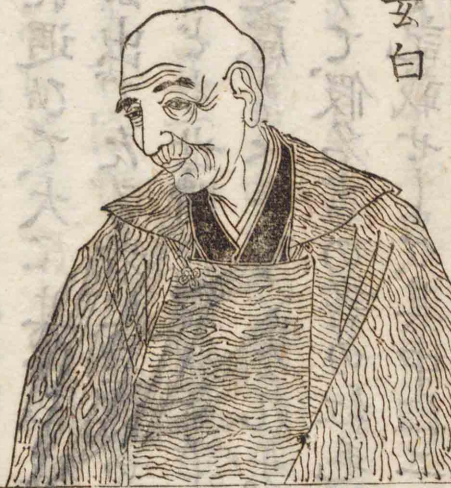


郎等ハゴンプトウエルドと曰へる辭書を蘭人ハ借受け之を寫すこと二本に及べり。蘭人之を見て、其精勤あるに感下、其辭書を西氏ハ與へたり。將軍此事を聽て、蘭書を見んと欲し、其一本を上らむ。因て圖入の本を撰み、台覽に供せしむ。吉宗惟へらく、能く書中の文義を解し、あは、有用の事少らざるべしと。因て文藏と玄文とに命下て、蘭語を學ばしめしと云ふ。然れども、其頃和蘭貢使に付添ひたる通詞に就て蘭語を聞くたを得るのみよて、蘭人の滞在ハ、僅々の日數あるゆゑ、數年を経て記臆せるは、單語と二十五字を書き習ふに過ぎざりきと云へり。然れども江戸よ於て、蘭語を習ひたる濫觴ハ、此時に在りと曰はざるを得ず。延享元年青木文藏の評定所儒者とあるに及

で、命を奉下て長崎に赴き、蘭人及通詞と相謀り、蘭書を講習す。此時西善三郎、吉雄、幸左衛門等の三人、文藏に依頼して、蘭書講習の事を幕府ハ請願し、その許可を得たり。蓋前日奉行所の許可を得たるハ、未十分公然たる者ハ非ざるを以て、文藏の來るを好機會ありとし、請願せし者あるべし。文藏ハ學成りて江戸に歸りたるハ、不幸にも將軍の薨むるに遇ひて、大に其學を傳ふることを得ざりき。青木氏の門ハ出でたる者に、豊前の人、前野良澤と曰ひし醫師あり。然れども世間の慣習として、常人の横文書を讀むは、猶遠慮をべき事となれり。當時後藤梨春と曰ひし本草家ありて、假名書の書の紅毛談と曰ひし者を著し、和蘭の事を記載せしが、其中に二十五文字を彫刻せりて、絶



杉田玄白



請ひ官金を以て購得し、時機あらば之を讀み破らんとす。會千住、小塚原に於て、幕府の官醫、婦人の刑屍を解剖せしあり。二人其場に臨み、蘭書の内景圖に比較するに、五臟六腑、一々符合せざることなく、且漢醫の古説と大ふ異なるを見て、始めて悟る所あり。良澤、玄白及中川淳庵の三

版を命ぜらばき、同時の人に、若狭國の醫官杉田玄白と曰ひし人あり、明和八年、和蘭人參府の時、通詞の一人、内景書「ターヘル・アナトミカ」カスパリユス、アナトミカの二部を賣らんとする者あり。玄白藩に

人相議して、彼の「ターヘル・アナトミカ」を研究せんとす。良澤ハ青木氏の門人となり、且長崎にて西吉雄の二人に學びたるを以て、此人を會頭とし、其書を會讀したれども、文法も通ぜず、辭書をも有せざれば、春の日の長き、一日も僅一寸二寸許の文字さへも解し得ること能はざりしに、少も屈せず、毎月の會を繼續したり。其中良澤ハ長崎より往き、辭書を得て歸り、更に譯語を考定し、四年の間、稿を易ふるおと十一回、遂に一部の譯書を成し、題して「解體新書」と曰へり。安永三年、開板す、刻成るに及び、之を幕府に内獻し、且閣老及京師の九條、近衛の諸家へも、一本を贈呈し、紅毛談の如き咎を受くるおとなく、世上に傳播をることを得たり。是蘭書翻譯刊行の始あり。此後蘭學を醫術と共に



小學新讀本 下卷 九  
研究したる人ハ杉田の門ハ大槻玄澤あり。桂川の門に宇田川玄隨あり。專蘭學に従事せるハ稻村三伯あり。三伯後に海上隨鷗を稱し、バルバ氏の辭書を和解す。是辭書を翻譯せる始あり。長崎に於てハ中野柳圃と云ひし人あり。弱冠の頃より心疾を患ひ、隱居して世人と交わらず。夙に和蘭の文法を解して、讀書の正解を得たり。之と相交りて、益を得たる者に、馬場佐十郎、吉雄、權之助等あり。權之助ハ出島在留の甲比丹「ニーマン」に就て文法を講じ、出藍の譽を得たり。柳圃と權之助とハ、文法を講じたる始祖あり。大槻玄幹ハ、此二人に従ひて文法を習ひ、江戸に歸りて、蘭學凡の一書を著し、詞の品類を論じ、是江戸に於て文法を講じたる始あるべし。予ハ舊師名村ハ右衛門ハ、權之助の

門人にして、又善く文法を講説せり。此の如く蘭學ハ次第に盛ふなりたれども、外寇の事も、政事の一大問題となり、鎖國攘夷の説と、互に相軋して、之を爲に奇禍を被りたる者少あらば、渡邊登の馱舌小記、慎機論を著して獄に下り、遂に自裁せし如き、高野長英の夢物語を著して獄に

渡邊登



獄に下り、後脱逃して、捕吏を拒ぎ、自裁せるが如き、小關三榮の登の事に連累せんふとを恐れて、自裁せし如きことあり。又予ハ舊師高島四郎大夫の洋式の砲術を傳へたる嫌疑を以て、獄に下り、十二年



縲綫の中に在りし如き皆其尤著しき者あり。外船の邊海を伺ふこと頻繁となり、海防の事急務となるに及び、洋學者の需用甚多く、譯書大にせよ行をるゝに至り、幕府の兼て設けしる翻譯局を天文臺より九段坂下に移し、名を改めて蕃書調所と曰ひ、箕作阮甫、杉田成卿の二人を教授とし、古賀謹一郎を以て其頭取とす。後其名を改めて、洋書調所とし、新に學校を一橋外の護持院原に建て、後又之を改めて、開成所と稱す。此開成所の幕府と與に廢せられ、庭草人を没して、狐狸の栖とせざるを、予ハ亡友内田正雄と與に學校判事の任不膺り、之を再興せしむ。明治元年の末なりき。

第二十二章 水ノ分子

一滴ノ水ハ純然タル一物ニシテ、分ツ可カラザルモノ、如シト雖、其實個々ノ微物ヨリ成レリ。此微物ヲ稱シテ、水ノ分子ト云フ然レドモ、此分子ハ、如何ニ高度ノ顯微鏡ヲ用井ルモ、人ノ視力ヲ以テ、之ヲ明視スルコト能ハズ。又後來モ殆之ヲ明視スルニ至ル日アルヲ望ムベカラザル者ナリ。唯此説ニヨリ、水ノ性質ヲ解釋シ得ルヲ以テ、姑、此臆説ヲ立ツルノミ。

水既ニ個々ノ分子ヨリ成ルトキハ、是等ノ分子ハ諸物互ニ相引クノ理ニヨリテ、必各分子ヲシテ互ニ相接近密合セシメントスル傾向アルコト明ナリ。然レドモ、至強ノ壓力ヲ加ヘテ、水ヲ壓縮スルトキハ、水ノ容積ヲ小ナラシムルコトヲ得ルヲ以テ、之ヲ考フルニ、水ノ分子ハ互ニ相密



着セズシテ、分子間ニ、多少ノ空隙ヲ存スル者ナリト云ハザルヲ得ズ。

抑水ノ分子ハ、互ニ相引キテ密着セントスル性アルニモ拘ハラズ、水ノ分子ヲシテ、此ノ如ク相隔タリテ空隙ヲ存セシムル者ハ、果シテ何等ノ作用ニヨルヤ。且水ノ容積ヲ壓縮セシムルガ爲ニ、至大ノ力ヲ加フルモ、其壓縮シ得ル所ハ實ニ些少ニ過ギザルヲ以テ見レバ、水ノ分子ヲシテ相隔タラシメントスル抵抗力モ、亦強大ナリト云フベシ。コノ強大ナル抵抗力ハ、果シテ何物ノ作用ニ出ヅルヤ。曰ク是熱ノ作用ナリ。何トナレバ、水ノ熱ヲ減ズレバ、其容減ジ、熱ヲ増セバ、其容増ス。容ノ減ズルハ、各分子互ニ相接近スルニ由ルモノニシテ、容ノ増スハ、各分子ノ相隔タルコト多

キヲ加ヘテ、其空隙ヲ大ナラシムルニヨル者ナレバナリ。

水ノ分子ヲシテ、互ニ相密合セシメントスルカハ、之ヲ引カト云ヒ、之ヲシテ相隔タラシメントスルカハ、之ヲ反撥カト云フ。而シテ反撥力ハ、分子ノ急速ナル震動、即熱ノ作用ニヨリテ生ズルヲ以テ、強キ熱ヲ加フレバ、反撥力ヲ増加シ、分子間ノ空隙ヲ増大シテ、平時ヨリモ多カラシムルコトヲ得ベク、又其熱ヲ去ルトキハ、次第ニ其反撥力ヲ減シ、分子ヲシテ密合シテ、復相離レザラシムルニ至ル。之ヲ要スルニ、引力反撥力ニ勝テバ、氷結シテ、固體ト爲リ。反撥力引カニ勝テバ、蒸發シテ、瓦斯ト爲リ、反撥力ト引カト相平均スレバ、即液體ト爲ルナリ。



水ノ熱度三十九度ヨリ下レバ、水ノ容ヲ減ゼズシテ、却リテ膨脹スルハ、是水ノ分子ノ相互撥シテ、離隔スルニアラズ、其密接スルニ當リテ、分子ヲ排置スル方法ヲ變ズルニ依ル。例ヘバ、十六人アリ、每人ノ間各一尺ヲ隔テ、四列ヲ作り列ト列トノ間モ、亦一尺ヲ隔テタルヲ、其排列ノ方ヲ變ジ、一列ト爲シテ、正方形ヲ作ルトキハ、每人ノ間ヲ縮小スルモ、尚前ヨリ大ナル地面ヲ塞キ得ルガ如シ。試ニ霜ヲ取り、其結晶ヲ驗スレバ、明ニ一種ノ形式ヲ爲スヲ見ルベシ。

**問答** 水ノ分子ヲシテ相隔タラシメントスルハ何ノ作用ナリヤ。 三體ノ變化ハ何ヨリ起ルヤ。 水ハ何故ニ其容ヲ増スヤ。

第二十三章 水銀ノ原子

水ノ個々ノ分子ヨリ成ルコトヲ知レバ、之ニ依リテ又他物ヲ推知スベシ。例ヘバ水銀ノ如キモ、亦個々ノ分子ヨリ成リ、其熱ノ多少ニ從ヒ、或ハ固體ト爲リ、或ハ液體ト爲リ、或ハ氣體ト爲ルコト、毫モ水ニ異ナラズ。然レドモ、水銀ノ分子ハ、水ノ分子ト、互ニ其性質ヲ異ニスル者アリ。水銀ノ分子ハ、如何ナル手段ヲ用井ルモ、決シテ之ヲ分析シテ、二物トナスコト能ハズト雖、水ノ分子ハ之ヲ分解シテ、二物ト爲ス能ハザルモノヲ稱シテ、原子ト云フ。即分ツベカラザル、極微分子ト云フノ義ナリ。全ク一種ノ原子ヨリ成リ、他種ノ原子ヲ交ヘザル物體ヲ、單體即元素ト云フ。





水ヲ分解スルトキハ、酸素、水素ノ二物ト為ル。此二物ハ共ニ氣體ナリト雖、近年極寒ノ溫度ト、巨大ノ壓力トヲ加ヘ之ヲ液體ニ變ゼシムルコトヲ得ルニ至レリ。此二素ハ、又個々ノ分子ヨリ成リ、其分子ハ如何ナル方法ヲ用井ルモ、之ヲ分解シテ、二種ノ物ト為ス能ハザルコト、水銀ノ分子ノ如キモノナリ。

水酸二素ハ如何ナル分量ニテ、水ヲ成スヤト云フニ、今水ノ重量ヲ九ナリトスレバ、其中ノ八ハ、必酸素ニシテ、一ハ水素ナリ。而シテ酸素ノ重量ハ、水素ニ十六倍スルガ故ニ、其重量ヲシテ一ト八トノ分量ナラシメントスルニハ、酸素ノ一原子ト水素ノ二原子トヲ以テ、水ノ一分子ヲ構成スル者ナリト云ハザルヲ得ズ。是ニヨリテ之ヲ見レバ、水

ノ一分子ハ、其實三個ノ原子ヨリ成レル者ナリ。凡一個以上ノ原子相集マリテ、一分子ヲ成セル者ハ、之ヲ分解シテ、前ノ原子ニ復スルトキハ、其物質ヲ變化スベシト雖、其量ニ至リテハ、毫モ變化スルコトナク、又如何ナル方法ニ於ケルモ、全ク之ヲ滅セシムルコト能ハザルノミナラズ、之ヲ増減スルコト能ハザル者ナリ。之ヲ物ノ無盡性ト云フ。

問答

水ノ分子ト水銀ノ分子ハ如何ニ相異ナルヤ。原子及元素ノ義ヲ問フ。水ノ分子ハ如何ナル分量ヨリ成ルヤ。無盡性トハ何ヲ云フヤ。

第二十四章 孝子の馬鈴薯 (一)

其名さへ耳遠き日耳曼のブランデン、バルグと云ふ地



住める軍曹に、一人の奇童あり、平素好みて兵士の為  
をこざして遊びければ、人々綽名して兵士のフリッツとぞ呼  
びよける。其頃普佛の戦争ありて、父ハ一の旅團に屬して、  
ライン河の地方より出て、ありなる所、或る時の消息、軍  
中にてハ、野菜に乏しければ、良き馬鈴薯の五合程をあり  
まば、如何に味よくたうべ申をらんとぞ申し送りける。フ  
リッツハ父のふみを見て、如何にもして、馬鈴薯を父の許に  
携へ行かむやと思ひて、直に薯を藏めなく、土窟に入り、其  
良き者を一た、かに撰りとりて、袋に入れ、母に覺られ  
と、いと恐びやるに、何所とも知らぬ、父の陣屋を尋ねんと  
て、出て行きけり。  
正午の比みとあるさ、やのなる、人ざとふ來あり、逆旅

めく家のあるを幸ふツト入りて、側に并べあり、腰掛に  
腰打ちあけて、休ひけるに、是家の廣間より、數多の旅客の  
打集へると見え、中より一人の老いたる兵士ありて、何  
れの戦ふて脚を失ひ、にや、木もて造れる義脚を帯びた  
り。翁フリッツの方をふり向きて、いと訝かしげに、頭の先よ  
り足の先まで、見つめてあり、其處なる幼兒御身の何  
の爲とて、其處にハあるぞと問ひかけられ、フリッツハ事も  
なげみ、久しき以前、父なる人、旅團に召し上げられて、ライ  
ンに在るが、今の馬鈴薯さへ得がとき際ありと聞き、之を  
携へて、ラインの陣屋より赴くを。此袋の中を見られ、美  
しき粒の薯のみを集め申したりと云ふ。何と申をぞ、異し  
き大とを云ふ者のな、今一度子細ふ述べよとあるに、フリッ



ツハ尚其次第を詳に語りし翁ハそゞろに涙を流し御身ハ誠に軍人の子なるぞよ世にも愛でたき幼児ありとて抱きしめて接吻せれば一坐の諸人感動淺からば見えにたり。逆旅の主人もフリッツの奇特の心に感ずて其日ハ強て家にとゞめて厚く饗應し夜よ入ればフリッツを新に來せる旅客に引き合せなぞしてやめていと柔き卧蓐を與へて眠らしめぬ翁ハ又かくも豪膽き幼兒ハ一錢の財もあらず遠き旅路よ上れるに之にハあむけの錢をも取らせざるハ心なきわざならんとて同ト旅客の人に物語れば諸人も實ハ實ハ同トて財布を開きて幼兒ハ與へけるを逆旅の主人取り集めてあくる朝幼兒の起き出づるを待ち兼て朝餉おど十分に與へ金をバ衣服の裏に縫

ひさみて幾許回往く先きの無事あらんことをいのりて心ならびもフリッツを送り出しけり。フリッツハ其日も亦たよなき足に長き道を行き暮らしてとある村里よ宿を求めける其が物語を聞くもの皆其心情の優しきを愛でいたらぬハなかりなり。かくて日數經ぬる程にラインの地もはや程近く遙の前路に普軍の陣屋見えぬをばフリッツハ飛ぶが如くみ走せよりて立番の兵士に向ひ息をもつかず我が父ハ何處に御在すぞや教へ給へと問へば兵士ハ荒々しき聲にて呆氣の童よ何とて汝の父を知るべきさてハ何と云ふ旅團に屬する人あるぞと問ひ返されて我が父ハブランデンバルグ旅團の精撰隊に屬する軍曹にて名をバマーチン



ボラアマンと申さふりと答ふ。其儀ならば善く罷り通りて  
捜し見よとあるふ。フリッツハ趨り過ぎけり。かくて一の番  
卒に許さるれば、又他の番卒に見咎められ、やう／＼にし  
て、一の軍監の許に至りしに、軍監怪みて、詳らかに子細を  
尋ね、童子の心掛の殊勝あるに感し、轉愛憐の情を催しけ  
れば、童子の頬を撫て、唯我と共に來よ、御身の父ある人  
を見出さんも、程はあらトとていと嚴めし、大きなかな  
る帷幔引き張り、其頂より廣き旗を翻し、所に導き入り。  
フリッツハ喜ばしげし、軍監の側に傍ひ、手にハ馬鈴薯を入  
れたる袋を提げ、恐るゝ色もあらず、幕中に入るに、中にハ高  
官の人と覺し、目をゆきよてに、裝束つけたるが、大なる  
椅子に腰打ちかけ、卓上に地圖を廣げて、戦地の地理を稽

へ明むるさまあり。軍監ハ慇懃に禮を施して、其側に進め  
ば、大將屍目にあけて、僅に目禮せり。  
フリッツハ幕の入口よ立ちて、其ありさまを見るに、其人こ  
そハ一軍の總大將とハ知られたり。軍監ハ大將の耳に口  
をよせて、何事をかき、やくと見えしが、大將ハ始て是ま  
で地圖よ注ぎたる眼を仰むけて、心を軍監の話よ傾け、折  
々外の方を向きて、フリッツをぞ見たり。話の前後聞き  
終りて、軍監にハ何事をの申しつけて、出遣り童子此處  
に來よとありしをば、フリッツハ恐るゝ色もあらず、兵士ら  
しき形容つくりて、大將の前よ立てり。大將其方の名ハ何と  
申をぞと問ふ。フリッツ、ボラアマンとて、兵士のフリッツと云  
ふ綽名ある者に候と答ふ。大將打笑みて、更し其方ハ何地



より來りしぞと問ふ。ブランドンバルグよりと答ふ。何故に此地ふ來りしぞと問へば、我が父に馬鈴薯を持ち來れるなりと答ふ。大將の實に異なるふともある者あると、獨語してためらひし辭を嗣ぎて、其方の持てる袋よ、馬鈴薯のありやと問ふ。如何にも、我が家の土窟に貯へたる中の、いと良き者を持ち參り候。是見給へ、いづれも圓く滑らかあるふと、河原の石の如くに候。わざとて、袋を開きて、大將よ示し、かば、大將の可憐の幼兒よ、如何にも美しき薯なるぞ、其味もいみじかるべし。程經をば、再汝を此室よ招かん、しばし次の室にて休ひ、薯の袋をば、此室に預け置くべしとて、フリッツを出し遣りぬ。フリッツは、大將の言に従ひ、次の室よ至り、大きやある椅子にもをせしに、長き

旅の疲よや、又の慣れぬ場所に心使ひせし氣の疲よや、忽に頭を垂れて死したる如く、み眠りなり。かくて、フリッツは一睡の中に、一切萬事を忘れたまども、大將の顔に軍中を走せまはりて、童子の父ある軍曹を捜し廻り、辛うして求め當りしかば、室に來り見るに、フリッツは、熟睡して前後を知らぬさまありければ、呼び覺しもせて出て行き、其父の追て晚餐を與ふべきよしをつげ、同僚ある二三の將校も、晚餐に招待すべきよしを申送りぬ。

第二十五章 孝子の馬鈴薯(二)

時刻のよしと、招のきたる將校は、大將の室に來り集ひぬるに、その中に身分賤しきひとりの軍曹の立ち交るるを見て、人々顔見合せて、訝り怪む様ありし、中にも軍曹は、



事のさよの常あらぬに、一層深くあやしき思をなすにけり。室の隅に、大なる皿の布にて蔽へるがありしに、人々ハ何物あらん、めづらしき食物を入れたるよやあらんなど、推量して頗に打ち見やりけるが、中にハあせりて問ふものもありけりとも、大將ハ時々軍監と顔見合せて、打笑むのみにて、更にふきを告げざりぬり。やがて、大將ハ軍曹に命じて、蔽へる布をとり去らしめければ、人々皆目をよせて、皿を見るふ、こハ如何に、皮のまゝに煮たる馬鈴薯ありぬれば、平生滋味に口を肥やしたる賓客どもハ、稍氣落してぞ見えたりける。ひとり軍曹のボラアマンのみハ、平生欲しと思ひつる馬鈴薯のつや、かぶりまげあるを見て、心よよろおふ様ありけり。

大將ハ、一坐を見渡して、今こゝに備へたきたる馬鈴薯ハ、我ハ物にハあらで、軍曹ボラアマンのものふれば、方々を招待せしハ、我ハはあらで、軍曹ふりとおぼしめし給へと語りぬれば、聞くもの、肩をそびやかして、尻目ふかけて、軍曹を打見やり、最不興氣に見えふけり。大將ハ、頓着もせて、諸君も、此馬鈴薯の如何ふして我ハ陣屋に來りしかを聞き給ひふば、此薯の一片を味ふさへ、身にあまる榮譽とおぼしめし給ふらんと云ひぬれば、人々聲ををやめて、如何にさる事の候ぞ、早く語りて、聞かせ給へと通りけり。

大將ハ頭うちふりて、否々ト官ハかゝる物語に嫻ひ侍らず。諸君も、強て事の本末をヤツガレ知り給はんとならば、別に方



方の問に答ふべきをべおそれ、傍ある軍監をうちあぐめ、此物語りを為すべき人を呼び來れとぞ、命トなり。軍監罷り出でしあべ、人々如何ある人の出來るらんと、片唾をのみて、待ち居たる中にもボラアマンハ、事柄の異しきに、半ハ恐れ、半ハ疑ひ、心の鼓動さへ、せき込みて、はり裂くをかりし覺え、顔色もかひりて、心も落着のほ。頓て軍監に從ひ、幕引きあけて入り來れるハ、快活ある一人の幼兒ふて、おれをんボラアマンの子息、フリッツなりけり。軍曹ハ幾多の貴き人の前をも打をれ、手を擴げて、フリッツの方に走り寄り、抱きつきて、そなたハ如何にして、此處へ來りしぞやと問はれて、フリッツハ何の答もなく、うれし泣きに、大聲あげて、打ち叫び、父の胸に走り付けば、此方も腕の限

りに抱きしめ、暫しハ物をも得云ハざりなり。一坐の瀟々其様を見て、親子の情ハ、斯くもあるのと感じぬ者ハなかりけるぞ、中にも大將の兩眼ハ、涙のしづく滴りなり。頓て軍曹ハ、其子をして椅子に坐せしめ、心の稍落ち着きたるを見て、其方ハ何故に、此處へ來りしぞや、又如何にして、此父をば見出し得たるぞや、包まぬ語り給へ、ありし憚る者ハ、縦令國王の前なりとも、其方ハ孝心のほどを物語らん、何の妨げかあるべきと勵まされて、フリッツハ父の手を握り、徐し其あらまをぞ物語りける。傍に聞き居たる賓客ハ、是迄イヤキ軍曹の、同ト席に列るを見て、快ならず思ひ、いと高ぶりてふるまひける。この幼兒ハ深く父を愛して、百里あまりの道を遠しとせ



ず一袋の馬鈴薯を持ち來りたる心を愛で、俄に顔色を和げ、皆々いと親切に物しけり。させば又軍曹の、子の心にほざされて、笑ふかと見れば、又忽に泣き沈み、我を忘れて、幾度となく、其子を抱きしめて接吻し、種々様々の事を尋ぬれば、フリッツも亦怯く色あぐいと、真面目に應答して、あたりに入るおとを打ち忘れたる様ありけり。又、  
次之ありて大將ハ、一同に目くませして、室を去らしめ、己も亦出で行きて、唯親子兩人のみを残しけるが、一時間ほど經て還り來り、左の手にハ、長きかきものを持ち、右の手にハ、數多の黄金を入れたる囊を携へ、軍曹に向ひて、是ハ御身の兵籍を免むる證書なるぞ、中ハ終身年金を與ふべき旨を認めたり。又是なるハ、軍中の將校がたゞの金を

醸して、子息フリッツに與へんとて、贈れるなり。フリッツの成長して、自之を用ゐ得る迄ハ、大切に貯へ置かれよ。これより家に歸りて、妻子と共に、餘命を安樂に送らるべし。家許にてハ、卿を待つおと切あらんとて、證書と金囊とを授けたり。

かゝる大將の禮遇、あゝる手厚き年金、其子の得たるかゝる巨萬の財産、おの三ツの中、何をか最喜ぶべきと、惑ふよごよよるおびびて、ボラアマンハ深く大將の恩を謝し、此ハ又分に過ぎたる恩賞にて、老卒の敢て受くべきものよ、あらば如何なる廉にて、斯る恩ふあづのる事に候ぞや、と問へば、大將答へて第一ハ、戰爭中、汝の立てたる武功により、第二にハ、去頃の戦に、汝の受けたる手傷ハ、終身汝を不具



あらむべきにより、第三よ、汝の子息、フリッツの奇特の心  
を愛づるに依るあり。斯る善き子を持てる父ハ、善人ある  
ふと疑ふべくもあらず。さる善人の、こゝを戰場に用ゐん  
よりも、寧ろこれを家庭に用ゐるかと、我が君の御為なるべ  
し。さらば静のよ、出立召されよ、家に歸らば、他の子をも教  
育して、此子の如く、善き子とあらしめ、他日ハ誠の武士に  
仕立て、國の為に恩を報せしめらるべし。フリッツの成長の  
後よ、必これ我が旅團に送りて、我が君の為に銃を荷  
はしめられよ。さらば、とて立ち別れけり。

第二十六章 ロッキー及セルカルク(一)

此編ハ加那太鐵道に乗ト米國より本邦に歸朝せんと  
して、ロッキー及セルカルクの兩山を通過せし人の紀行

あり。

二三日以來、夫の延長六百里有餘の大平原を横貫し、白雪  
に覆ををたる平原と、其平原を限ぎる地平線と、地平線上  
の天空との外に、一物も見ず。十分の退屈を感じたる時、  
汽車ハクロフトと云ふ一停車場に來たれり。是より  
始てロッキー山が皚々たる白雪に包まれて、六十里外ハ立  
つを認む。乗客ハ二三日來の倦怠を破り、新鮮なる好奇心  
を以て、汽車の窓外を眺むるハ、山勢北より南に延び、萬里  
一障壁を爲して、汽車進行の前に立つが故に、何れの所ハ  
汽車の行くべき道ありやと疑ふ許りあり。山間を迂廻し  
て行くハ、少時にして、四面山を以て圍まれたる高原に  
出づ。其中央に、一の新都會ありて、カルガレイと云へり。即



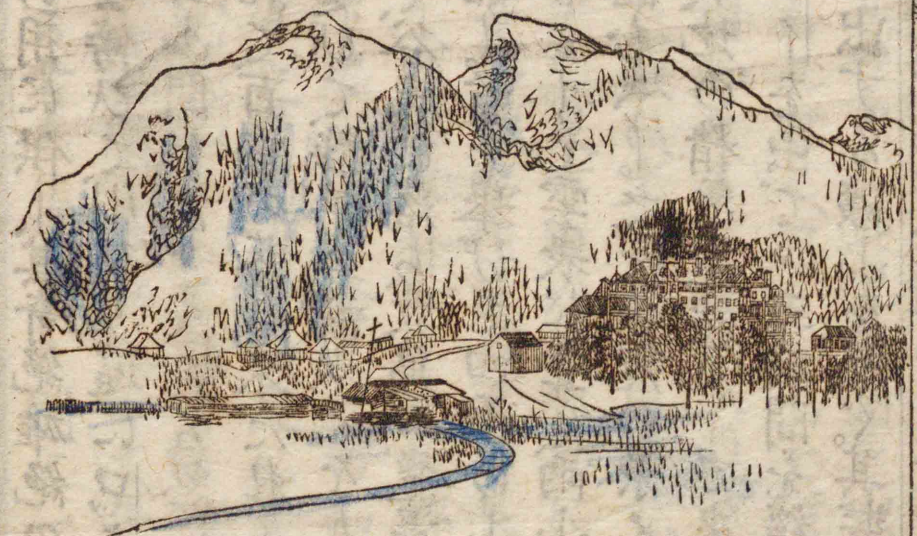
ロッキイ山麓の都邑中、最大なるものあり。此地海面を出  
 つるおと二千五百尺有餘の高地おれども、ロッキイ山を横  
 斷して來たる暖風ありて、氣候を調和せるの故に、冬日の  
 雪も頗淺く、夏日の青草綠樹滿野を蔽ひ、土質肥美にして、  
 田圃の收穫多し。近年英國を始として、東方の人民次第に  
 移住し來り、牧畜農耕に従事し、且是等の移住民多く、良  
 家に生長したる人民なるのゆゑ、風俗淳朴にして、他郷  
 人の對し、頗親切なりと云ふ。迂廻して山道を登り、一の山  
 を過ぐれば、又他の山ありて來たり、之を過ぐれば、更にま  
 た他の山ありて來たる。千山萬岳、山又山にして、極まる所  
 を知らば、而して山と山との間より、必廣き原野ありて、牛  
 馬を蓄養し、所在に農夫の監守する者あり。是より別に一

の客車を加へて、之を乗客眺望の用に供し、其奇絶雄絶の  
 景色を玩ぶことを得しむ。軌道は傍ひて、川あり。遙にロッキ  
 イの巔より、迂餘屈曲して、數千の山間を流を來たる。忽に  
 して兩個の斷崖の間に感められて、百雷の落ち來たれる  
 が如き音を發し、忽ちして、廣く延びて、靜平の湖水となり、  
 忽ちして幾千尺の奇巖を掠めて、谷底に落ち、數萬の飛瀑  
 を造り出して、白練を垂るゝの如し。首を擧げて四面の山  
 を望めば、雪を戴ける峻巔、峨々として雲表に聳え、兩山  
 相接せる所に、大なる氷原を認むべし。之を美麗の景と  
 云ふんより、寧雄壯と云ふべし。天地の精氣、凜然として來  
 たり襲ふを覺ゆかくて、カルガリイを出で、三時間を経  
 たるとき、有名なる無煙炭を産出する礦山を過ぐ。其装



置の大なるハ軌道に傍ひて  
 積みあり、石炭の量を見て  
 も、其一斑を察知をべし。夫よ  
 り程もふく、バンフと稱する  
 停車場に着す。此地ハ温泉を  
 以て有名なる地にして、夏時  
 に在りてハ病を興して遠方  
 より集り來たる浴客多く、山  
 中に熱鬧の一市街を現出す  
 るふと、猶我が國の伊香保、熱  
 海等に異ならばと云ふ。然れ  
 ども、冬日に在りてハ、唯夏日

館旅のフンバ



の用に供する、宏大なる旅館等を見るのこゝにして、別に許  
 多の旅客ありと見えす。此地を廻りて、七八個の高山あ  
 り。何れも巍然として空蒼を掠め、各山皆特有の形狀を爲  
 し、特有の山色あり。真に絶景あり、旅館の下、數千仞の處に  
 川あり。色青くして翡翠の如く、蜿蜒して山間を回り、遂に  
 前山の裏にかくれ去る。此地の景色を、日本の山水に比せ  
 ば、先箱根を以てすべきか。然れども、其規模の大小に至て  
 ハ、同日の談にあらば、加那太政府ハ、此地を以て、全國人民  
 共有の公園と爲し、天然の奇景を補ふに、人工の美を以て  
 せんと務め居れども、のこる造化の奇工を極めたる所に  
 ハ、區々の人工ハ、到底補綴の効をかるべし。



通ぐたる最高處に達す。海面を抜くこと五千尺餘あり。然れども是鐵道の通ぐたる道路中の高處にして、ロッキイ山の最高處にのらば、ロッキイの高峰は、是より猶七千尺の高さを以て、空中に聳ゆるあり。又二個の川あり、源を此地に發す。一は北してホドソン灣に注ぎ、一は西してコロンビヤ河に合して、太平洋に注ぐものあり。汽車溪流に沿ひて、西よ下るふと少時よして、譯して蹴馬峽と言ふべき峽道を過ぐ急流石に激して、泡沫と為り、空中に飛散して、旋風の狀を為す。尚下ること五六里、汽車の前面に當り八千尺の斷崖直立す。其上に厚さ五百尺の氷原を戴く。之をスチイブン山と名く。ロッキイの奇觀是を以て終りと爲す。其傍に銀山あり。許多の小軌道を造り、貨車の往復絶

えは。是より川に沿ひて降る其景色略前より似たり。

第二十七章 ロッキイ及セルカルク(二)

尚溪流に沿ひて、ロッキイを下り。或は深き谷を横ぎり、或は險しき岩を掠め、遂に大峽道に入る。左右の石壁高さ數千尺にして、殆日光を蔽ひ、晝も尚暗し。急流石趾を噬みて、其聲怒るが如し。絶頂より二時間を経て、三千尺を下り、とき、峽道始て開け、眸を放ちて遠望をべし。其眼界の達する所に於て、更に又一山脈あり、滿山雪を被ふり、山光凜然たせども、其形状は、稍ロッキイ諸山より異なるを見る。是即セルカルク山にして、鐵道之を貫通せり。ロッキイとセルカルクとの間に、廣き高原あり。其中央を貫き、一帯の川ありて流る。是即コロンビヤ河なり。汽車の高原を過ぐるに

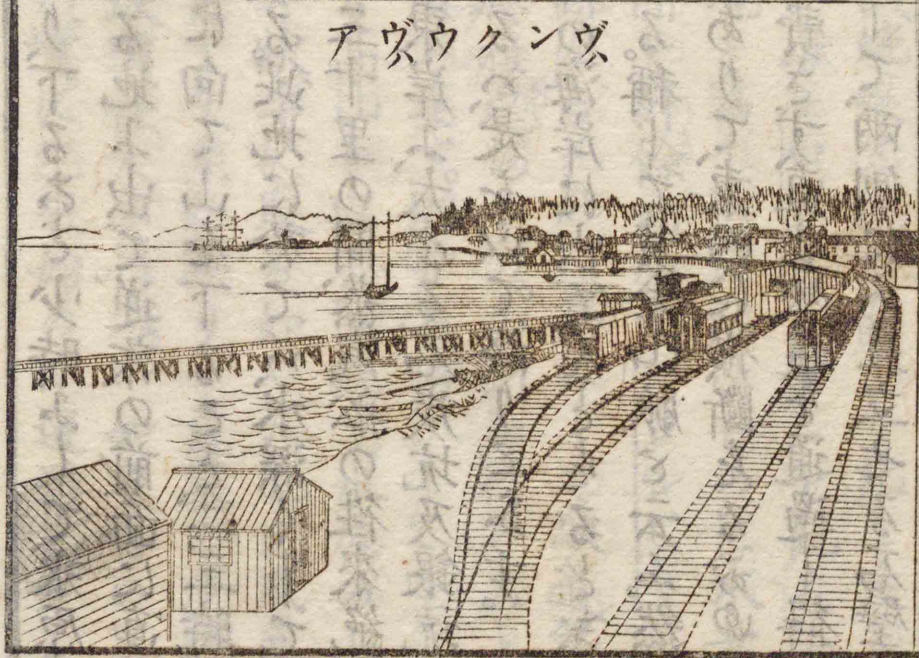


當りて、東にハロッキイの諸山、蜿蜒として南より北よ走るを望み、西よハセルカルクの雄をロッキイと争ふを觀る。共ハコロンビヤ河畔を以て境と為し、河に沿ひてハ、巨木老樹鬱蒼として茂り、平野の間を紆餘曲折す。コロンビヤ河を渡りて、セルカルクの山路にあらば、忽にして峽道忽にして隧道、忽にして飛橋、應接遑あらば、山側を行くおと十一二里にして、始めて山頂に達す。地勢平曠にして、空氣清透あり。四面ハ白皚々たる高山を以て圍繞し、氷原の上より山下に混轉し來たる狀、手に取る如くに見え、風色實に慘澹たり。又山上の岩角より、垂れ懸りし飛泉の凍結して、水晶簾となり、數萬の玻璃柱、大さ巨木の如きもの、累々として石壁にあらはれるハ、實に生來始めて遭遇したる

奇觀あり。此頂上に達してより、下るおと少時ふして、氷原旅館と稱する美麗の逆旅ある地に出で、逆旅の前面に直立八千尺の裸石あり。尚西方に向て山を下ること、二三時にして、再コロンビヤ河を渡る。此地に於てハ、水深くして且廣し。是より南の方、凡百二三十里の間、蒸汽船の往來絶え、運輸の便甚多し。故に其東岸ハ、大なる石炭坑及銀坑あり。セルカルク山を通過するハ、是を以て終りとす。セルカルク山を過ぎ、太平洋の海岸に出でんとするとき、忽一山ありて、前面に現れ來る。稱して黄金山脈と云ふ。然れども此山脈ハ、狭き峽道ありて、東西に横斷するおゆゑ、汽車ハ別に攀縁の勞を費さず、直し峽道を通過し得るなり。其長さ二十四五里にして、兩側にハ、直立せる石壁



ありて并列し、大樹巨木、谷底に繁茂して、幾千年來の者あるを知らず。此峽道を過ぐれば、乃全く山道を経盡したる者ありて、始て目を展べて平野を望み、快濶なる天日を仰ぐおとを得べし。軌道も沿ひて、一大湖水を見る。忽顯はれ、忽隱れ、忽出て、忽没し、以て乗客の目を慰むること一二時間にして、遂に復見えぬ。次に出て來るものハ、サウス、タムソ



ン河に沿ひたる、廣き原野にして、滿野開墾せる田畝、若くハ牧場より成り、殆一株の樹木だに見えず。牧牛、野馬、徐に草を食ひて徘徊するのみ。  
是より、汽車ハ又兩個の小山脈を横斷し、幾多の原野を過ぎ、十七八時を経て、ヴンクローヴに達するなり。其間の水光山色、奇あらざるにあらず。然れども、既にロッキイとセルカルクの勝を見たる眼よハ、奇なりとも見えぬ。ヴンクローヴハ我の横濱と定期航海の便ある良港にして、創開より十數年を経たるも過ぎざれども、サンフランシスコと南北相持して商權を争ひ、其繁華日を追ひて盛あり。

高等 小學 新讀本 下篇 第二卷 終

高等 新賣本 下篇 第二卷 百五十九 教育書專賣所

小 學 三 年 級 下 半 第 二 卷 第 二 十 九 頁 百 五 十 九



明治廿七年三月廿二日  
文部省檢定濟日

明治二十六年七月二日  
同 年七月六日  
同 年三月九日  
同 年三月十二日

印刷  
發行  
訂正再版印刷  
發行

改定價金壹錢五厘

東京小石川區久堅町七十四番地

編述者

西村正三郎

東京神田區柳原河岸十四號地

發行兼印刷者

辻太

東京神田區柳原河岸十四號地

印刷兼發行所

普及舍

版權所有

廣島縣安佐郡沼田高等小學校

第四學年全

李本純



